

教授法が 大学を変える

2015 年度版

日 本 私 立 大 学 協 会

教 育 学 術 新 聞

協力：日本高等教育開発協会

深化する アクティブ・ラーニング

昨年に引き続き、アクティブ・ラーニングの事例を募集し、他大学でも活用できるユニークなものについては、日本高等教育開発協会の協力を得て教育学術新聞において紹介し、また事例を電子化し、各大学のFD活動の参考にして頂くため「教授法が大学を変える」を企画した。結果、21大学から22事例の応募を頂いた。

アクティブ・ラーニングが、全国の大学で幅広く、また、多様に展開されつつある。本年は特に、ディプロマポリシーと各授業の到達目標の整合性を意識した記述も多かった。

今後は更に、一人の教員による授業改善の工夫から教員間の組織力を活かした授業改善の工夫が増加すると考えられる。

ピックアップ

●産業能率大学「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」

ジェネリックスキル習得を目指す初年次ゼミ

帝京大学高等教育開発センター 教授 井上史子

●北海道薬科大学「薬学生入門」

ジクソー法とふり返りによる「能動的学習法」

徳島大学総合教育センター 教育改革推進部門 久保田祐歌

●椋山女学園大学「ケースメソッドⅠ」

ケースを自らつくる体験型芸術教育

東北工業大学教職課程センター 講師 中島夏子

(教育学術新聞 2635号 (平成28年2月17日付) 掲載)

愛知工科大学	電気回路
朝日大学	専門演習Ⅳ
植草学園大学	道徳教育指導法
関西外国語大学	アカデミック・リーディングⅠ・Ⅱ
九州産業大学	プロジェクトベース設計演習
	特別実習 A・B
共愛学園前橋国際大学	電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ／同演習Ⅲ
近畿大学	特殊講義Ⅰ(企業発展メカニズム分析)、
	特殊講義Ⅲ(企業発展実態分析)
産業能率大学	基礎ゼミⅠ(前学期)、基礎ゼミⅡ(後学期)
四国大学	教育情報処理論Ⅰ
静岡産業大学	専門ゼミナール
十文字学園女子大学	プレゼンテーション技法
淑徳大学	政策過程論
湘南工科大学	創造デザインコンペ(前期)／創造デザイン研究(後期)
椋山女学園大学	ケースメソッド
崇城大学	Sojo International Learning Center で行われる全授業
東北文化学園大学	基礎セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
中村学園大学	中村学
文京学院大学	レクリエーション援助
北海道薬科大学	薬学生入門
明海大学	学修の基礎Ⅱ(コミュニケーションスキル)
目白大学	統合技術演習

産業能率大学「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」

ジェネリックスキル習得を目指す初年次教育

帝京大学高等教育開発センター 教授 井上史子

【はじめに】

産業能率大学は、1979年、情報化社会が進展し、経営における情報技術の役割が増す中で、社会の要請に応える人材育成を目的として、日本で初めての経営情報学部を設置した大学として設立された。教育理念の根幹をなすものは、学問を大学の中だけにとどめず実践の場に移し、世の中で実際に役に立つ能力を育成する「実学教育」であり、学問としての経営学の成果を踏まえつつ、現実のビジネス社会の問題を学生自身で発見し、状況の変化に適応して問題解決できる能力を育成することが重視されている。すなわち、学生が自ら考え、行動できるしくみをつくるという「学生が主役の教育体制」が特長であり、インターンシップやアクティブラーニング、外部とのコラボレーション授業などの活動が、近年、大学関係者の注目を集めている。

現在、経営学部現代ビジネス学科・マーケティング学科、情報マネジメント学部現代マネジメント学科の2学部3学科が設置されており、現代ビジネスやマーケティング、マネジメントに関する知識とスキルを修得し、社会において活躍するビジネスパーソンを育成することを目的としている。

【教育理念】

本稿で紹介するキャリアデザイン科目「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」には、担当者によれば、建学の精神および同大学がこれまで培ってきた教授法が凝縮されている。つまり、経営学の専門知識をビジネスという実践の場に移すためにはジェネリックスキルが不可欠であり、ジェネリックスキルの修得および専門知識の活用にはアクティブラーニングが最適と考えられた上で、授業設計されているとのことである。さらに本科目では、その実施を通じて学生のみならず担当教員にも、建学の精神とアクティブラーニングを通じた深い学びについて改めて考えるきっかけとし、教育改善、学修成果の向上を支える基盤科目であってほしいとの願いが

込められているとのことである。

【科目概要】

「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」は、経営学部の全一年生が履修する必修科目であり、大学生活への導入的な位置づけの科目である。大学で学ぶ上で必要な基礎能力、知識、スキルを習得することを目的とし、特に社会で活躍する人材になるために必要な基礎力（ジェネリックスキル）や仲間と協調して議論や作業を進める習慣を身につけることが重視されている。さらに、科目間や教員間の連携を図り、基礎ゼミⅡにおけるPBL（Project Based Learning）が、1年次配当の他の科目（「会社のしくみ」等）で修得した知識を活用する機会となるように設計されている。

本科目の到達目標として、「①大学初年度に必要な不可欠な基本能力、知識、スキルを習得し、学習活動で活用できる」、「②仲間と協調して議論や作業を進める習慣が身につけている」、「③基礎的な問題発見・解決能力が身につけている」、「④大学生としてのモラル・マナー、街との共生を意識し、生活の中で実践できる」の4つが設定されている。また、本科目では、ディプロマポリシーのうち、「自己のキャリア形成に対する意識を持ち、常に新しい知識や技能を学び続ける意欲を持っている」、「自分の意見を述べることと人の意見を聴くことができ、協調・協働して活動することができる」、「21世紀の社会を支える一員として、多様な価値観や文化を尊重し、社会の変化に柔軟に対応して、社会の発展に積極的に関わることができる」の3つが重視されており、これら「科目の到達目標」と「ディプロマポリシー」との関連はシラバスに記載された上、学期中に三回（初回、中盤、最終回講義）、担当教員から学生に周知される場も組み込まれている。

【授業方法】

授業は、1クラス約30名、全20クラス、約

20名の担当教員により、全回アクティブラーニング型授業により実施されている。授業運営は、担当教員と Student Assistant（以下、SA）のチームティーチングによって行われ（写真1、2参照）、SAを務める上級生は、事前研修への出席が義務づけられている。SAの事前研修では、成績評価を除いて担当教員と同一のティーチングガイドおよび共通教材が配布され、教員の補助者ではなく、指導者として主体的に授業運営に係ることが求められ、そのために必要なファシリテーションスキル等の研修が実施されている（平成27年度）。



写真1 授業風景



写真2 教材提示を支援する SA
(PC背後の女子学生)

授業はオリジナル教材に沿って進められますが、この教材は「講義・説明」と「演習」の2つのパートから構成され、レジュメの形で毎回配布される。教材には、適宜、個人ワーク、ペアワーク、数名によるグループワークなどの指示が書かれており、担当教員およびSAは教材に沿って授業を進行すれば、自然にアクティブラーニング形式の授業が展開できるよう設計されている。また、SAはオンラインで授業進行のポイントや担当クラスの抱えている課題などについて情報交換を行い、

必要があれば科目主務者^(注)または科目担当者に問い合わせを行うなどして、授業に積極的に関与する。科目主務者は担当教員やSAの意見を取り入れ、学期中にもプログラムや教材の修正を行う。

(注) 科目の担当責任者。授業内容および運営に責任をもち、同一科目で複数のクラスが設置されている場合は、科目担当者間の連携・情報共有を図る役割も担う。

本授業の大きな特徴は、基礎的なアカデミックスキルとジェネリックスキルを同時に修得できるようにプログラムされていることにあり、初年次に修得すべきアカデミックスキルとジェネリックスキルの重なり合いを検証し、授業の中で両者を同時に養成するプログラムが独自に開発された点にある。また、入学直後に実施されるオリエンテーションキャンプも含めて、基礎ゼミⅠ・Ⅱを通じて、初年次に目的の異なる計3回のPBLを実施している点も特徴的である。オリエンテーションキャンプでの第1回PBLは、ビジネスや経営に対する興味関心を深めることが目的であり、基礎ゼミⅠでの第2回PBLは、修得した情報分析力や協働力などの「ジェネリックスキルの活用力向上」を目的としている。基礎ゼミⅡでの第3回PBLは、前学期に他科目等で学習した「専門知識の活用」を目的に実施される（図1参照）。このように目的の異なるPBLが、担当教員やSAのみならず、教務課や図書館、学生サービスセンター、後援会^(注)などの学内組織が一体となって協力し、運営されていることは特筆すべき取り組みと言える。

(注) 在学生の父母を会員とした組織。大学と会員との連携、学生の学習や福祉に寄与することなどを目的に活動している。

なお、本科目の成績評価は、①授業出席35%（グループワークにおける積極性、参画度も評価する）、②授業外学習15%（振り返りシート、レポート等）、③課題提出50%（授業振り返りシート、課題レポート、PBL発表資料および発表等）で行われるが、担当教員には、科目主務者から詳細な評価方法（各課題の評点など）が指示される。

【成果】

初年次および2、3年次に、全学生にPROGテスト^(注)の受検を義務づけ、自身のジェネリックスキルの向上を客観的に把握することが奨励されている。学生は、この結果を踏まえてアカデミックアドバイザー（本科目の担当教員）と面談を行うことにより、自身の学習計画等を修正することができる。また、科目主務者は教育プログラムの改善などを行う。

		学習 動機 づけ	知識・ スキル の修得	ジェネ リック スキル の活用	専門 知識 の活用
オリエンテー ションキャンプ		PBL #01	BAS : Basic Academic Skills GS : Generic Skills		
基礎 ゼミ	前期		BAS GS	PBL #02	
	後期		BAS GS		PBL #03
実務教育 科目など			専門 知識		

図 1 初年次科目・活動と到達目標との関係
(杉田一真准教授作成)

初年次に実施される 3 回の PBL は、学生の学習意欲を喚起し、知識・スキルの修得から活用までのプロセスを意識づけることに貢献しているそうであり、授業評価アンケートでは『伸びたい。できるようになりたい。学びたい』との気持ちが自然と芽生えた」「グループワークを通じて、自分自身が成長でき、課題を見つけることもできた」などのコメントが寄せられているとのことである。

(注) Progress Report on Generic Skills の略。学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同で開発した、大学卒業生として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向—ジェネリックスキルを評価・育成するためのプログラム
(河合塾 HP より <http://www.kawaijuku.jp/research/prog/>)

【おわりに】

本取組は、基礎的なアカデミックスキルとジェネリックスキルを同時に養成するプログラムが独自に開発されていること、担当教員と本授業を経験した先輩学生 (SA) のチームティーチングによってアクティブラーニング型授業が運営されること、初年次に 3 回にわたる PBL が実施され、学生が授業で学んだ知識や技能を実際に活用する場が組織的・計画的に準備されていることなどを特徴としている。さらに、アクティブラーニングや初年次教育に精通した科目主務者が配置され、授業担当の教員や SA の疑問や相談にすぐに対応できる体制がとられていることも注目される。近年、日本の大学では、アクティブラーニング型授業の有効性が検証され、とくに初年次教育において盛んに導入されるようになってきた。一方で、組織的な体制が整わない中、コツコツと個人的な実践を積み重ねている教員も多く見受けられる。同大学では、科目主務者や授業を担当する教員の負担を減らすべく「教育支援センター」が立ち上げられたり、図書館や後援会などの学内組織を巻き込んだりと、大学を挙げてアクティブラーニング型授業に取り組んでおり、組織的な教学マネジメントという点において大きな示唆を与える好事例と言えるだろう。

北海道薬科大学「薬学生入門」

ジクソー法とふり返りによる「能動的学習法」

徳島大学総合教育センター教育改革推進部門 久保田祐歌

【はじめに】

北海道薬科大学は、「地域社会の要請に応え、質の高い薬剤師を養成、輩出することによって北海道の医療の発展に貢献する」ことを建学の精神とし、薬剤師養成の課程として6年制薬学部を有している。薬剤師を目指す学生が学士課程教育において、薬剤師の基本的な資質と能力を身につけられるよう、平成18年度から薬科大学に共通のモデル・コアカリキュラムに基づく6年制の教育が開始され、初年次教育科目「薬学生入門」は、平成27年度からの改訂モデル・コアカリキュラムの施行とともに開講した。現在、北海道薬科大学薬学部のカリキュラムは約7割がコアカリキュラム、その残りが大学独自に設定するカリキュラムとなっており、「薬学生入門」は後者に位置づいている。本科目については、薬学教育分野に所属する教員を中心とし、1年生のクラス担任も、指導の一部を担当している。今回、本科目を設計した責任者である野呂瀬崇彦准教授にインタビュー調査をさせていただいた内容をご報告する。

【概要】

「薬学生入門」は、一年生（定員210名）全員が受講する必修科目であり、入学直後の1年前期前半（4～5月）に開講される。授業では、大学での学修の仕方や授業の活用方法、様々な場面に合わせたコミュニケーションの取り方について学生が学ぶこと、学修に必要な資源の収集、準備、活用方法から学修内容のまとめ方、課題発見と解決へのアプローチ方法の修得が目標とされている。本科目は、オムニバス・共同方式の演習授業であり、「Ⅰ 大学生活におけるコミュニティの形成」「Ⅱ 健康への価値観を高める」「Ⅲ ラーニングスキル」「Ⅳ コミュニケーション」の4区分から構成される。以前は、「大学入門」として開講されていたが、別立てだったいくつかの科目が統合され現在の形式となった。

アクティブ・ラーニングの取組が含まれる「Ⅲ ラーニングスキル」は、グループワークなどを通じて、ディプロマポリシーおよびカリキュラムの理解、自己学修の方法、問題解決能力を身につけることが目標とされている。さらに小区分として、「1. 薬剤師への道のり」「2. 学修の意味とプロセス」「3. 図書館活用法」「4. 能動的学習法」「5. 学修プロセスの省察」の5つに分かれる。アクティブ・ラーニングの手法を用いる「4. 能動的学習法」は4回の授業で構成され、4名の教員が共同で担当している。

【方法】

「4. 能動的学習法」では、授業内容を学ぶためにケースメソッドを使い、学生は4～5名ずつに分かれてグループ学習を行う。最初の2講（2日間）はジクソー法、次の2講（2日間）ではPBL

（problem-based learning）が導入されている。前身の科目の「大学入門」では3講（3日間）ともPBLが行われていたが、グループワークにおいて学生が「フリーライダー」にならず、一人ひとりがグループで役割を果たすことの重要性を認識させるために、ジクソー活動を取り入れて再構成された。ジクソー法を用いた授業の第1回目では、テーマ「がん患者に対して薬剤師ができることは何か」を学生に伝え、問題を共有した上で、ケースメソッドのシナリオから学習項目を4つ提示する。そして、次の授業までにグループでそれぞれの分担を決めさせ、各自で学習レポートを作成の上、Moodleに提出させる。学習レポートはルーブリックによって成績評価され、その観点は、学習内容が学習項目を十分に網羅し適切な表現で記述しているか、適切な学習リソースを選択しているか等の5つから構成されている。

ジクソー法を用いた第2日目の授業では、まず「エキスパート活動」として、担当の学習項目のグループで学習成果を共有する。次に、もとのグ

ループに戻り、それぞれの学習項目の「エキスパート」として、互いに説明し合い、質問を行う時間をとる。その後でディスカッションを行うことで、テーマに対する理解が段階的に深まるように設計している。また、今回は「モデル学習レポート」を学生に配布し、自分に不足している点がないかどうか、自分が書いたレポートと比較し修正できる機会を設けている。

第3回、第4回の授業で行うPBLは、基本の流れはジクソー法と同様であるが、シナリオは、第1回に配布した内容の後日談とし、内容により興味を持てるように工夫している。シナリオにおいて、学生は自分自身で最低3つの学習項目を立てて学習レポートを作成し、授業でPBLの活動を行う。PBLはジクソー法よりも学生に自発性が求められる

ことは前者に含まれる。ピア評価については、大学で開発したピア評価システム（ウェブ上で入力、閲覧が可能）により、4～5人のグループメンバーに対して行う。評価項目に沿って尺度評価を行うだけでなく、定性的な自由記述を行う項目も設けられている。自分のグループメンバーのみを評価できる設定に従い、自分も含めたグループメンバー全員を評価する（評価結果は本人に分かるが、評価者の名前は現在の設定では匿名となっている）。学生にピア評価を指示する際には、評価の基準を歪めることになるので、好き嫌いで評価しないようにと注意を促すが、尺度評価にはそれほど重きを置かず、定性的なフィードバックがきちんと入力されているか、学生がピア評価を期日までに入力したかどうかを重視している。

AL	回	教員の指示	学生の課題
ジクソー法	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「在宅で療養中のがん患者のシナリオ」を提示する ・「がん患者に対して薬剤師ができることは何か」をグループで検討させる ・本症例を理解するための4つ学習目標を提示する 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで4つの学習項目のそれぞれの担当を決定 ・担当部分を自己学習し、学習レポートにまとめる（Moodleで教員に提出・次回の授業に持参）
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・担当した学習項目ごとのグループで、「エキスパート活動」を指示する ・もとのグループで担当の学習項目を説明し合うことを指示する ・モデル学習レポートを提示する ・課題2を提示し学習方法を検討させる ・ふり返りのレポートを書かせ、ウェブ上でピア評価を指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習レポートをもとにジクソー法の形式で学習する ・グループで4つの学習項目のそれぞれの担当を決定 ・モデル学習レポートを見ることで、自分の出来具合を確認する ・ふり返りレポートをまとめ、グループ内でピア評価を行う

【表1】「薬学生入門」の「Ⅲ ラーニングスキル」の小区分「4. 能動的学習」（第1回～2回）

るため、ジクソー法を用いて、個人がしっかり学習することがグループへの貢献にもつながるということを学生に実感させた後でPBLを行うという順序にしている。

ジクソー法、PBLのそれぞれを導入した最終回（第2回、第4回）に、学生は授業で気づいたことや学んだことを振り返りレポートにまとめ、Moodleで提出する。ふり返りレポートのルーブリックの観点は6つあり、自己学習に対する省察やグループ学習に対する省察がなされているか、これらの省察を踏まえた改善策に関するものである。これにより、学生は各学習サイクルの終了時に、何ができていて何ができていないかを確認できる。

成績評価は、学習レポートが70%、学生同士のピア評価が30%という配分である。ふり返りレポ

【成果】

本授業は、内容の異なる4つの区分から構成されているため、「Ⅲ ラーニングスキル」のうちの「能動的学習法」のみの授業評価アンケート結果を取り出すことはできないが、「能動的学習法」に関する自由記述項目においては、「大変だった」という感想が最も多く、「学生自身がやる、というスタイルがやる気を持たせるのにいいと思う」という意見がみられた。また、コミュニケーションのとり方や重要性についての理解が深まったというコメントも数多くあり、ピア評価によっては、自分のグループ学習への関わりを改善した学生がみられたという。さらに、グループ・ディスカッションの内容や提出物から、回を追うごとに学生の学習が深まっていく様子も教員により観察されて

いる。

【おわりに】

本授業の特徴は、医療現場のシナリオ活用による臨床現場と学習内容の結びつきの提示、ジクソー法やピア評価システムによるグループ内の社会的役割の意識化、ルーブリックによる評価基準の事前提示と厳格化の要素を組み込み、ジクソー法とPBLを段階的に導入することで、学生の薬剤師になるモチベーションを高めつつ、自己学習のスキルや態度を養うことができるように設計されている点にある。学習理論に基づいた設計に加え、

初年次学生の多様性に鑑み、どのようにしたら学生が興味をもてるのか、学習しやすいのかということが検討され、それが工夫として授業に効果的に反映されていることがインタビューからうかがえた。授業の際には、事前に担当教員4名で実施案を共有した上で、互いに補完しながら授業を進め、随時進行の流れを修正するという。こうした担当教員間の連携と学習理論に基づいた設計との両方が、学習目標達成の基盤となっていることを強く実感した。

椋山女学園大学「ケースメソッドⅠ」

ケースを自らつくる体験型芸術教育

東北工業大学教職課程センター 講師 中島夏子

【はじめに】

椋山女学園大学は、愛知県名古屋市にある7学部11学科4研究科からなる女子総合大学である。今回紹介する「ケースメソッドⅠ」を開講している教育学部のこども発達学科は、保育士と教員の養成課程を持っており、十分な指導力と人間的な魅力にあふれた保育士や教員の養成を目指している。その目的の下、初年次から保育園から高等学校の教育現場において実習を実施し、さらには海外研修を行うなど、実践的でありながら、長期的な学生の成長を見据えた教育が提供されている。今回取り上げる「ケースメソッド」は、その中で、専門知識を基盤に理論と実践を紡ぐ役割として位置づけ、指導力と人間的な魅力を深めるための授業科目となっている。

【「ケースメソッド」科目】

「ケースメソッドⅠ」は3年次の前期に開講される必修科目であり、現実にある課題に主体的に取り組み、実践的指導力を身につける事を目的とし、保育や教育の現場が抱えているさまざまな問題や課題について、少人数で議論したり、調査・実践を行ったりするものである。この授業を通して、保育指導・教科指導のための専門知識や技能を高めるとともに、テーマを深く掘り下げ探究することで、実践的指導力をつけることを目指している。このような共通の目的の下、担当する教員の専門性に応じてテーマや内容が設定され、そのテーマは子育て支援、障がい児とその親、ミュージカル、デジタル化教材、自然環境、国際教育等と多岐に渡る。これらのクラスの中から、全3年生180人が、その希望に応じて10クラスに分かれて履修する。同様の科目が、3年次後期に「ケースメソッドⅡ」として開講されるが、これも必修となっている。今回は「ケースメソッドⅠ」の中から、学生達からの評価が高い、造形表現や図画工作を専門とする磯部錦司先生の授業を紹介する。

【「ケースメソッド科目Ⅰ：生活と文化創造】

磯部先生が担当する「ケースメソッドⅠ」の授業は、「生活と文化創造」をテーマとしている。子どもと生活や宿泊を共にしながら行う、自然環境の中での芸術体験（アート・キャンプ）への参加と、そのための事前と事後の学習によって、この授業は構成されている。科目の到達目標は、表現や文化の創造について人間理解を深めること（知識、理解）、実践事例の収集と分析から子どもと文化について考察すること（思考、判断）、演習と討議を通し生活との関係を深めること（態度・志向）である。磯部先生は、共同体の中で子どもと直接関わることを通して、教育や保育について考えて欲しいとの思いから、この授業を実施している。このような磯部先生の強い思いを反映して、この授業は一般的なケースメソッドの手法を超えて、複数の要素が組み込まれたものとなっている。

【方法】

この授業の中心となるのは、2泊3日のアート・キャンプでの活動である。学生は、岐阜県飛騨山中で行われる「子ども芸術村」と、富山県南砺市で行われる「利賀村アート・キャンプ」のどちらかに参加をすることとなっている。いずれも大学の夏休みに2泊3日で行われるため、集中講義の形式を取る。「子ども芸術村」はNPOが主催するアート・キャンプと連携し、子ども50名、学生、音楽家、料理研究家、美術家が参加し、山中の1軒屋において2泊3日の生活を共にするものである。そこで、学生は子どもたちの引率やワークショップの開催を担当し、子ども達とともに川や森の中で遊びながら、絵などの芸術作品を作っていく。「利賀村アート・キャンプ」は利賀村の民泊に泊まりながら、自然をテーマとした作品作りと、利賀村の保育園や小学校の子ども達を対象にした、芸術作品作りのワークショップを行うものである。

【写真1】は利賀村の保育園で、「土から生まれる世界」を題材としたワークショップを行っている

時の様子である。



学生達はこれらのワークショップを行うために、事前に指導案を作り、その準備をしておき、こうした一連の活動を行うだけでも、学生達の保育士や教員としての能力は十分に伸びうるものとなっている。しかし、この授業の主眼は、アート・キャンプでの子ども達の行動や学生によるワークショップを「ケース」として扱い、そこでの子ども達の行動や作品の観察や分析を学生に行わせる事にある。「子ども芸術村」では、子どもの表現活動を援助しながら、その様子を観察することでエピソードの収集を行い、活動後にそれに関する討議を行っている。また、子ども達が描いた絵を、それが描かれた生活との関連性から分析するという事も行われている。「利賀村アート・キャンプ」では、ワークショップのファシリテーターを担当する学生と、参与観察で子どもの活動の記録を取る学生とに分かれ、活動後に、それぞれの立場から全体で検討する時間が取られている。このような観察や分析のプロセスを通して、学生達は、子どもやその文化との関わりについて本質的な理解をすることが可能になっている。

このような授業の目的や構成を踏まえ、成績は、ワークショップの企画と実施の内容（指導計画の具体性、計画性、準備状況、実践内容について主体性や協力性を含めた5段階で評価）で4割、エピソードの分析の討議の内容（観察の視点をもって記録を収集し、その視点から考察し、討議されているか）で3割、そしてエピソードの記録とその考察のレポート（記録の分析をもとにした考察が、的確な視点をもって行われているか）で3割の割合で評価されている。

【成果】

東海地区で統一して行われている「社会人として必要な基礎力」アンケートを使って、この授業の学習成果を調べたところ、全17項目の平均値は同アンケート至上、最も高いものであった。特に、感受性に関して79%の学生が大変高まったと答えた他、創造力や傾聴力でも高い数値が出された。学生の記述による回答からは、子どもや自然、生活への理解が深まり、その理解をする上での芸術活動の役割を認識するようになった等の成果が見られた。また、子どもとの関わり方などの実践的なコミュニケーション力にも良い変化があったという。

【おわりに】

今回は、紙幅の関係で一枚しか紹介することが出来なかったが、磯部先生が見せてくださった写真に写る、学生や子ども達の姿とその作品の数々は、どれも生命感あふれる、楽しそうなものばかりであった。このような活動の中で得られる感覚は、学生達を、人としても、保育士や教員としても大きく成長させてくれるだろう。加えて、この授業は、参与観察や分析を行わせることによって、その熱狂的な体験を客観的に見る目も持たせることに成功している。こうした複数の要素がある事がこの授業の良さであり、椋山女学園大学の教育学部が目指す、十分な指導力と人間的な魅力にあふれた保育士や教員の養成にふさわしい事例であるといえるだろう。

電気回路

愛知工科大学

工学部 電子制御・ロボット工学科

永野佳孝

受講生数	40名
科目の位置づけ	<p>本学は、教育目標として「自立と夢の実現」を掲げ、「意欲」と「人間性」と「能力」をバランスよく備えた総合力に加えて、企業現場の必要に応える実践力を併せ持ち、企業から喜ばれ、歓迎される技術者を育成することを目指している。</p> <p>本科目は、専門教育の入口に位置し、2年生前期に開講されている。1年生前期に直流電気回路を学習する「電気基礎」では使用しなかった複素数や微積分などを、本科目では駆使して交流電気回路を解析することになる。数学力が必要なために、つまづく学生も少なからずおり、演習や課題を増やすなどの対策をしてきた。当学科では、平成26年度のカリキュラム改定において、基幹となる専門科目では、演習時間を増やすために週2回の3単位授業とした。2年生の前期科目では、本科目に加えて、「電子回路」と「材料力学」とが3単位授業になっている。</p>
科目の到達目標	<p>インピーダンス、アドミタンスの計算および直列回路、並列回路、直並列回路の計算ができるようになる。また、テブナンの定理、重ね合わせの理を理解する。そして電力についても理解する。</p>
教授法とその特徴	<p>本科目のように理論的に確立されている学問の授業では、講義形式が主体となるのが一般的であるが、たとえば回路図を数式で表現できるようになるには多くの演習を必要とする。本科目では、この演習を学生が能動的にできる仕掛けとして、演習プリントと小テストを用いて、極めて短いサイクルのP D C Aを行う方法を採用した。昨年度までの授業では、P D C Aサイクルが一週間であった。演習プリントの提出期限を次の授業時間の2日前とし、次の授業では添削した演習プリントを学生に返却をしていた。この方法の特徴は、学生の理解に合わせて授業の修正を最短時間でできることと、学生側も忘れないうちに演習結果を得られることである。平成27年度の授業では、演習の充実のために、授業が週2回の合計30回となり、水曜日と金曜日とに開講される。そこで、P D C Aサイクルをさらに短くして0.5週間を実現した。</p> <p>学生は、金曜日に配布された演習プリントを、翌週の火曜日までに提出をする。この演習プリントの理解度から水曜日の授業が修正される。添削した演習プリントも可能な限りに水曜日の授業に返却される。金曜日には、30分の小テストがあり、さらに学生個々の理解度が正確に確認される。小テストの結果をもとに、翌週の水曜日の授業が修正される。このように毎回の授業は、学生の理解度にもとづいてすぐに修正および改善されていく。学生らは、短期間で添削された演習プリントや小テストを受け取るので、学生一人ひとりが自分自身の学習到達度をわかることになる。</p> <p>演習プリントは、学生同士が教えあうきっかけづくりのために用い、小テストは、正確な学生の実力を把握するために用いている。なお、演習プリントと小テストには、学生がフアイリングしやすいようにB5用紙の26穴つきとしている。</p>

●専門科目●極めて短いサイクルのP D C Aを行う演習

特定の回の授業の流れ

金曜日と水曜日の授業が一体で運営されているので、両方の授業内容を述べる。

金曜日の授業の流れは次の通りである。

- ① 教員は、演習プリントを配布する。
- ② 学生は、演習プリントの表面にある復習問題と導入問題に取り組む（15分～20分間）。隣席との相談を推奨している。早く終わってしまった学生は、本日の授業での学習内容に沿った裏面の課題に取り組む。
- ③ 教員は、前回の演習プリントや小テストの返却を机間巡回しながら行い、演習プリントの取り組み状況を確認する。
- ④ 教員は、演習プリントの表面の答え合わせを、机間循環の結果をもとに解説をする（10分～15分）。
- ⑤ 教員は、前回の演習プリントや小テストからわかった理解不足の点や、間違いの多かった問題について正しい解き方を解説する（5分～10分）。
- ⑥ 教員は、講義を行う（残り時間：50分～60分）。
- ⑦ 学生は、翌週の火曜日までに演習プリントの裏面を完成させて提出する（理解の早い学生は⑥の間に完了させて、授業終了時に提出している）。

水曜日の授業の流れは次の通りである。

- ① 教員は、今日の授業の後半で実施する小テストの出題ポイントを伝える（5分）。
- ② 教員は、金曜日の演習問題や前回の金曜日に実施した小テストを机間循環しながら返却する。このときに理解度が変化した学生には積極点に声をかける。学生は、返却を待つ間は小テストの勉強に取り組んでいる（5分）。
- ③ 教員は、返却した演習プリントと小テストの問題について、全体の結果を踏まえて解説をする。あるいは、講義を進める（50分）。
- ④ 小テストを実施する（30分）。

評価方法

本学では、成績を「意欲」と「人間性」と「能力」の三要件に分けて評価している。教科により評価配分は異なるが、単位修得には、三要件の合計と能力の双方とも、6割以上の成績を収めなくてはならない。本科目での評価割合とその評価方法は次のとおりである。

- ① 意欲25%（教科書章末問題のレポートの合計点数15%、演習プリントの合計点数5%、小テストの合計点数5%）、
- ② 人間性15%（教科書章末問題のレポート提出日5%、演習プリントの提出日5%、教室での授業への取り組み姿勢5%）、
- ③ 能力60%（中間試験の得点20%、期末定期試験の結果40%）

学習成果

平成26年度と平成27年度の期末試験問題の中で、同じレベルの問題AからEの正答率を比較した結果を表1に示す。再履修者は計算に含まれていない。問題B、D、Eに明らかな正答率の向上が見られており、本教授法の成果を確認できた。なお、平成27年度の試験問題は、授業が週2回となっているため、平成26年度よりも試験範囲が広がっている。

表1 正答率の比較

問題	正答率（%）、部分点は0とした	
	平成26年度	平成27年度
A	28.6	28.6
B	42.9	64.3

●専門科目●極めて短いサイクルのP D C Aを行う演習

C	17. 1	17. 9
D	17. 1	53. 6
E	28. 6	71. 4

担当教員のこの授業に対する思い

授業とは、シラバスを軸にして、学生と作り上げていくものである。演習レポートや小テストを週2回添削するのは、かなり大変ではあるが、学生個々の理解状況がよくわかるので、授業を非常にやりやすい。特に理解度の向上が見られる学生がいるとき、大変うれしく感じる。

その他の特記事項

演習プリントや小テストなどの返却を教員が学生の座席まで行き渡すことができるように、座席指定で授業を実施している。その有用性は次のとおりである。

- ① 学生が演習プリントの取り組み中に返却ができるために、授業時間を有効に使うことができる。
- ② 学生の顔と氏名をすぐに覚えられるので、学生と対話しながら授業を進めることができる。

専門演習Ⅳ（消費者心理コース 3年生後期）

朝日大学

経営学部ビジネス企画学科

中畑千弘

受講生数	14名
科目の位置づけ	専門演習Ⅳの消費者心理（商品開発）コースでは、1年次から3年次前期までに学修した教養科目、専門科目（必修、選択）を土台として、商品開発やマーケティング調査など、社会に出てから体験することを先取りする実践型の演習を実施している。26年度は、通販を手掛ける会社とコラボレーションしてギフトセットを企画・開発した。具体的には、岐阜県の特産品を全国に発信できるようなギフトセットを開発しようと、学生がアイデアを出して企業に提案し、協働して商品化していくプロセスを体験的に学ぶものである。こうした企業の商品戦略課題について学生が主体的に提案を考え、実践することで、経営学部のDP（ディプロマ・ポリシー）である「ビジネスマインドを備え、地域と事業の発展に寄与し経営の一翼を担う知識と技量を身に付けた人材の育成」に資する中心的科目となっている。また、前年度に先輩が地元の瑞穂市商工会と連携して富有柿スイーツを開発したプロセスを次年度生が引き継ぎ、地元との連携を継続して行っていく基盤ともした。
科目の到達目標	本演習における到達目標は、以下の4つとした。 ① 株式会社セイノー商事との連携を通じ、実際の企業活動の一環として取り組むことで、社会人基礎力の向上を図り、社会における「適応力」を育むこと ② 連携企業の商品部社員から直接、商品開発課題についてオリエンテーションを受けることで、企業の商品戦略課題に真摯に向き合い、将来、地元企業を支える前向きな姿勢や意欲を引き出すこと ③ 学生が主体的に考えて、主体的に実践する取り組みを進め、チームで協働する能力、企画・プレゼンテーションする能力を身につけること ④ 商品開発のプロセスを企業が取り組む手順に従って実践することで、商品開発の知識を使って実際にプロセスを進めることができる応用力を身につけること
教授法とその特徴	「企業との連携による実践型のラーニング」 ①この演習では、企業のお中元通販の進行スケジュールに沿って、商品開発、販促ツール開発のプログラムを組んだ。その中で、学生に具体的な提案を求め、主体的に取り組むようにした。したがって、スケジュールは企業で要求されるスピードへの対応となった。 ②受講する学生がコンテストとして競争する状況を演出し、現実起きる提案型コンペを再現した。具体的な目標商品は、岐阜県の特産品を使ったお中元用のセット商品とし、特に、ジャンルは問わず、アイデアは広く募る形とした。 ③連携企業からのオリエンテーションに基づき、提案をまとめてプレゼンテーションを行い、結果については、企業側から学生に対し、採用、不採用の結果報告とその理由についての説明を行っていただいた。どのような点が評価され採用となったのか、どのような点に課題が残り、不採用となったのかを現実のビジネスの観点から回答いただくことで、リアルな企業取引の実際を学ぶものとした。

●専門科目（必修） ●3年次前期までの学修を基に、商品開発やマーケティング調査を行う実践型演習

演習は連携に基づく一連のプロセスで実施されたため、各回の演習の流れ（全体像）を示すこととする。

- ① 株式会社セイノー商事によるオリエンテーション（平成26年10月21日）
通販市場の動向とギフトカタログに関する概要を説明いただき、基本知識を共有した。同時に、これまでのカタログを参考に、各自で目標とする「詰め合わせ商品」のイメージをした。
- ② 学生によるアイデアワーク（平成26年10月28日、11月4日、11日）
「詰め合わせ商品」企画のためのアイデアワークを行った。岐阜県内のそれぞれの地域の人気店、人気商品についてインターネットで情報収集を行い、各自のアイデアをグループワークでブラッシュアップした。また、家族、友人へのヒアリングやデパートなどの贈答品を観察した。
- ③ 商品企画案の作成（平成26年11月18日、25日、12月2日）
「詰め合わせ商品」の企画案の作成を行い、8案の企画を作成した。どのような人を販売対象にするのか、そして、ターゲットはその商品をどのような商品と位置づけるのかを考え、商品コンセプトとセット内容を決定した。通販商品ということで、賞味期限や包装形態が異なる組み合わせは商品化しにくいことなど、連携企業からアドバイスをいただき、企画案を練り上げた。
- ④ 企画案のプレゼンテーション（平成26年12月9日）
学生から商品企画案の提案を行い、連携企業からそれぞれの提案内容に対する評価をいただいた。さらに商品の詳細の詰めが必要なことを認識した。
- ⑤ 商品化検討結果報告会と再提案（平成27年1月13日、20日）
学生に対し、連携企業から商品案ごとに検討結果報告があり、改善点などをアドバイスいただいた。後日、各商品案について、セット内容の見直しなどを行い、改善案を作成し、再提案した。
- ⑥ 採用可否報告（平成26年3月11日）
提案した8案の中の1商品が「2015年サマーギフト」として採用が決まった。
- ⑦ パッケージ、包装紙、リーフ、カタログの検討と制作（平成27年3月～5月末）
パッケージ、包装紙、セット商品に入れる「リーフレット（しおり）」、カタログの検討会、パッケージワークなど数回重ね、クリエイティブ案をアンケート調査し、最終的な商品とした。（⑦は春休み中の課題として学生が実施した）

特定の回の授業の流れ

評価方法

- ・セット内容を決定する企画開発過程での評価は、①連携企業による商品評価および実現可能性評価、②選定した商品を提供する発売元の提供可否の2つとした。
- ・パッケージやリーフレットの作成過程では、アンケート調査による評価および連携企業による評価とした。
- ・上記に加え、以下の項目を含めて総合的に評価した。
 - ①グループワークへの参画度、貢献
 - ②提案内容、プレゼンテーション評価
 - ・アイデアの新規性、進歩性
 - ・実現可能性
 - ・データエビデンスの活用度
 - ・プレゼンテーションの表現力（わかりやすさ）
 - ・プレゼンテーションによる説得力

●専門科目（必修） ●3年次前期までの学修を基に、商品開発やマーケティング調査を行う実践型演習

学習成果

①学生に対する振り返りアンケートにより寄せられたコメントは、総じて、興味喚起、学習意欲向上、理解促進にプラスに寄与したことを示す結果であった。

- ・学んだマーケティングや商品開発の知識を応用することで理解が深まった。
- ・特産品セット開発を通じて、地域の持つ資源にどのようなものがあるかに気が付いた。
- ・企業の実際の評価が返ってきたことで、リアルなビジネス感覚を実感できた。
- ・単なるひらめきアイデアだけでは商品にならないこと、ストーリーや緻密なターゲット設定、利用シーンのイメージングができて初めて商品としての価値を生むことがわかった。

②地域の企業と連携し、実際に販売される商品を企画、開発できたことで、学生の自信となったと同時に、今後、社会人となったときに、地域が抱える課題に対してどのように取り組んでいくかを考え、行動していくことの契機となった。

・マーケティングや商品開発の学修は、理論を学び、そして、それを実際のビジネスに活かしていける力を身につけることである。それには、学生が実践的なケースで課題解決を行うアクティブラーニングが欠かせない。そして、机上では体験できない現実を目の当たりにすることが重要である。お膳立てされた現実にはそぐわないケースでは、社会に出てマーケティングの仕事に就いたときにそのギャップに戸惑ってしまう。

・教員はどのような題材を使って学生に科目を教授できるかが重要であり、まずは学生の興味を喚起し、学習意欲を引き出すような事例を多く持つこと、そして、そのケースは旬の事例であることがポイントとなる。マーケティングや商品開発を体験させるプログラムを多く開発することが大切である。

・企業や商店との接点、社会人との交流を学生のときから多く持つことは、社会人基礎力の向上、社会事象に対する関心喚起に大いに役立つと実感している。

担当教員のこの授業に対する思い

授業風景



連携企業からのオリエンテーション



アイデアワーク、情報収集



学生からのプレゼンテーション



企業からの実現可能性報告会

●専門科目（必修） ●3年次前期までの学修を基に、商品開発やマーケティング調査を行う実践型演習



完成したコラボ通販商品「柿のお茶会」 掲載された通販カタログ

この事例に関する報告書、ウェブサイト等

セイノーグルメショップ

[URL:http://www.seino-gourmet.com/](http://www.seino-gourmet.com/)

その他の特記事項

27年度には、連携した企業とともに学内成果発表会を開催し、次年度生に向けて、成果と課題についてプレゼンテーションを行い、総括を行った。次年度生が地域と継続して連携に取り組むバトンタッチとなった。

成果報告会の様子

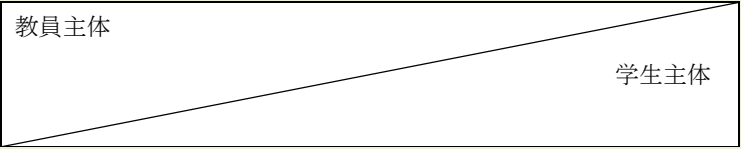
http://www.asahi-u.ac.jp/asahi_now/2015/20150710.html

道徳教育指導法

植草学園大学

発達教育学部／発達支援教育学科

村上悦子

受講生数	54名
科目の位置づけ	小学校教諭一種免許状取得に必要な教職に関する科目。必修科目として位置づけている。
科目の到達目標	1. 道徳教育と道徳の関連が理解できる。 2. 道徳資料を選び、指導案が作成できる。 3. 模擬授業を行ったり観たりすることで課題を見つけることができる。
教授法とその特徴	<p>【教授から学生主体の授業へ】</p> <p>「大学で質の高い道徳の授業ができる教師を養成する」ことが、道徳の教科化に向けて、課題として挙げられている。教科化して、授業時数を確保するだけでは「形骸化した道徳」になり、教科化した意味がない。「子どもが本気になって考える道徳の授業」にするためには、教師の指導力や授業の手法に磨きをかけなければならない。この指導力や手法を修得するために、15回の授業を以下のようにプログラムした。</p> <p>1～3回 道徳を指導するにあたり大切なこと 道徳教育と道徳の時間（特別の教科 道徳）との関連、教科化について</p> <p>4～6回 教員による示範授業（さまざまな指導・手法の授業を3展開）</p> <p>7～8回 指導案の書き方、模擬授業の話し合い、模擬授業の準備・練習</p> <p>9～14回 学生による模擬授業</p> <p>15回 まとめ</p> <p>図1のように回を重ねるごとに学生主体の授業となる。</p>  <p>第1回 第15回</p> <p>（図1）学生主体授業の段階的移行</p> <p>【授業の特徴】</p> <p>この授業プログラムの最大の特徴は、次の3点である。</p> <p>①学生が、教員の示範授業を児童役として受けながら、指導法や手法に気付き、習得する。</p> <p>②習得したものを取り入れたり工夫したりして指導案を作成する。</p> <p>③自ら行う模擬授業で実践し、検証する。</p> <p>このように小学校現場で求められている「児童主体の授業構成」をこの指導法で徐々に、「学生主体の授業構成」にすることを通して、指導力を身につける。</p> <p>毎回の授業の特徴は、「聴き合い活動」と「自己との対話」の活動を行うことにある。授業の予習として、課題について調べ、それを小グループで、「聴き合い活動」をする。「聴き合い活動」とは、相手の意見を否定しないで認めることをルールとした「話し合い活動」</p>

●専門科目●教師から学生主体授業（模擬授業）へ段階的に移行する

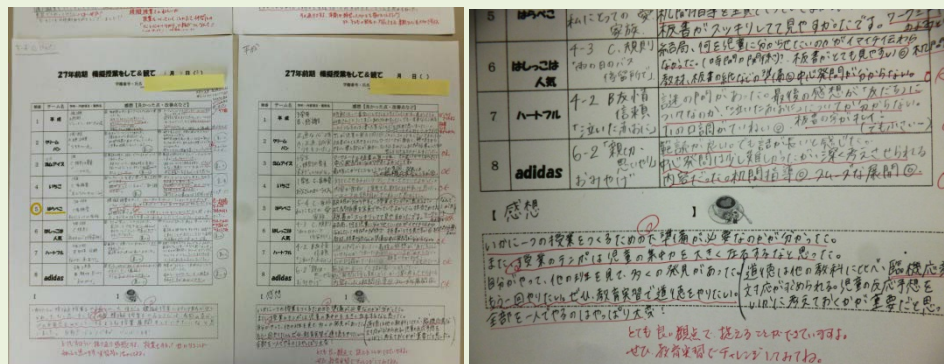
である。これは安心した教室環境づくりに繋がる。授業の最後には、振り返りの時間を設け、学んだことや気づき、思いを書く時間を確保する。これが「自己との対話」になる。「自己との対話」は、「特別の教科 道徳」の目標の中に新たに盛り込まれた「自己を見つめ」に匹敵する。道徳教育指導法の授業そのもので活用している手法が、小学校の授業で活用できる仕組みにしている。

学生による「模擬授業の実践」の授業の流れ 第9回～第10回の冒頭

- ・ 模擬授業をする前に、対象学年、内容項目、資料名を児童役の学生に伝える。
- ・ 模擬授業を行わない学生は、児童役となり授業を受ける。授業を受けながら良かった点や改善点をワークシート「模擬授業をして&観て」(図2)に記入する。
- ・ 模擬授業の終了後に授業者は、観ていた学生から質問や意見を受け、やりとりをする。
- ・ 教員から、模擬授業で気になった点を問題提示して、話し合う。
(例) 机間指導とは何をすることなのか? そのための具体的な手立てについて。
- ・ 授業者は、ワークシート「模擬授業をして&観て」に記入する。
- ・ ワークシートを回収。

- 教員: 次週までに、学生のワークシートに目を通し、代表的な意見の良い点と改善点を抜粋したものと教員からのコメントを記述してシートを作る。(図3)シートを印刷して、次の週に、授業者に渡す。他の学生にも知らせるために、掲示する。
- 学生: 次回に模擬授業を行うグループは、今回の課題を踏まえて授業の練習をする。
- *この繰り返しを行うことで、模擬授業が回を追う毎に質が高まっていくことになる。

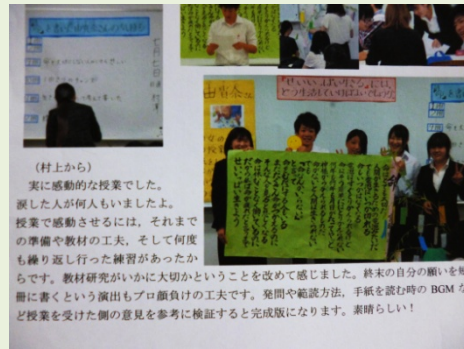
特定の回の授業の流れ



(図2) 学生が記入したワークシート ※朱書きは教員によるコメント



●専門科目●教師から学生主体授業（模擬授業）へ段階的に移行する



(図 3) 模擬授業をした学生に渡すシート（掲示用としても活用）

※写真は、教員が学生の模擬授業中に撮影したもの。（授業をした学生に画像を通して、どんな表情や態度で授業をしていたかを客観視してもらう目的がある。）

評価方法

「道徳の役割が分かり、適切な資料のもと指導案を作成することができる」について

評価方法：期末試験で道徳教育についての理解度を評価する。 }
作成した指導案が、適切な内容であるかを評価する。 } (60%)

「模擬授業への関心・意欲と効果的に実践しようとする態度を身につけること」について

評価方法：模擬授業の実践と模擬授業を観る観点で評価する。 }
授業の振り返りの記述で関心・意欲を評価する。 } (40%)

学習成果

・道徳に対する関心度について 受講前を 0 とし (−5~+5 で表記) 平均+4.57

【学生の道徳授業に対する変容】

受講前：「先生が物語を読んで聞く」「テレビ・DVD を観る」「心のノートをやる」

「退屈な時間」「辛くなる時間」「他教科に振り替え」「あまり記憶にない」

受講後：「楽しい」「さまざまな発見がある」「自分の気持ちについてたくさん考える」

「小学生の時、こんな道徳を受けたかった」「15 回の授業を受けた後、自分は小学生の時、表面の中味のない道徳を受けてきたのだなあ」「道徳というのは普段の生活では、盲点となってしまっていて、感じることも考えることもできないことに気付かせてくれる素敵な時間」「各教科と同等かそれ以上に大切だと思う」

【受講後の学びや自ら実行したい授業の意見】

- ・道徳は全ての教科の中心。思いやりやモラルを学び、素晴らしい人間を育てていける。
- ・まわりのものやことを大切にすることを児童が持てる、そんな授業をしたい。
- ・教師の工夫や声かけ次第で、児童は変容するし、授業が面白くなる。
- ・道徳の資料は副読本だけではない。身近なものやニュースにも目を向けるようになった。
- ・道徳の授業づくりは難しい。子どもの実態を把握し、適切な資料を選び、つくらないとまらない。しかしそれがびったりはまった時、子どもにとって忘れられない授業になる。
- ・何気なく受けてきた道徳の授業は、実際こんなに計画や準備をしていたなんて知らなかった。子どもの心に残る道徳の授業を行えるようにしていきたい。
- ・子どもに価値を押しつけてはいけない。
- ・児童の人生において重要であることを知った。教育実習で道徳を指導したい。

模擬授業は、回を重ねる度にスキルアップした。また、授業を観る目も肥えてきていた。以上のことから、学修の成果は十分あったと考えられる。

「道徳ほど魅力的な授業はない。」この思いが根幹にある。道徳教育は、教師と児童、

●専門科目●教師から学生主体授業（模擬授業）へ段階的に移行する

担当教員のこの授業に対する思い

児童相互の人間関係を深める。即ち、学級経営に反映される。現在、課題となっている「いじめ問題」や「学級崩壊」は道徳の授業をしっかりと行うことによって減少していくと考える。だからこそ、道徳の授業を大事にしてほしいと思う。しかし、学校現場では道徳の授業を軽視する傾向が少なくない。その理由として、指導法が曖昧、指導に自信がない、わかりきった授業になってしまう、どのように導いていけばよいかわからない、などが挙げられる。それは本を正すと大学の教職課程で道徳の指導方法を十分に学んでいないからである。私自身の小学校教諭としての実践経験と、指導主事として教員に道徳授業の指導をした経験を活かし、本学の学生には、「子どもが本気に考える道徳授業」を指導できるようになってほしいという熱い思いをもって授業に臨んでいる。また、その思いに応じて、学生が熱心に学修するので、相乗効果として質の高い学びになっている。

道徳教育と道徳科の関連について説明。 その関連について事例を挙げ、聴き合い活動。



模擬授業の様子



T1 役

授業風景



模擬授業の様子



机間指導役



模擬授業の様子

板書役



児童役に発言を促す

その他の特記事項

平成 27 年度には、千葉県長期研究生が科目等履修生として受講した。

● (Content-based Language Learning・専門複合科目) ●コンテンツ・ベースト、及び、トピック・ベーストによる言語学習・情報創造・情報発信の授業

アカデミック・リーディング I・II

関西外国語大学

英語キャリア学部英語キャリア学科

松宮 新吾

受講生数	アカデミック・リーディング I (26名:春学期) アカデミック・リーディング II (26名:秋学期)
科目の位置づけ	<p>本科目(アカデミック・リーディング I・II)は英語キャリア学部のカリキュラムポリシーの一つである「複合的学修」を実現するために必要な学修基盤を形成することを目的としている。複合的学習においては、「英語学」と「社会科学」の2系統の学問分野をオーバーラップさせ課題解決を図る。</p> <p>すなわち、「英語学を中心とした学問分野」と「社会科学を中心とした学問分野」の2つの柱を設け、それぞれの分野に関連したコンテンツやトピックスを用い、両学問分野を交差・複合させ、オール・イングリッシュによる学際的な教育を行う。</p> <p>そのために、授業外での予習やインタビュー課題、リサーチ等の課題を系統的・選択的に配列し、授業内においてはその成果に基づくディスカッションやプレゼンテーション等に基づく研究協議を重点的に実施し、コンテンツやトピックスに関する理解の深化や英語運用能力のみならず、学修内容に関わる発見や新しい価値の創造を誘発するというアクティブ・ラーニングを実践する科目として位置づけている。</p>
科目の到達目標	<p>ソーシャルメディアを利用し、世界を「聞き知り」、「読み解き」、「書き記し」、「話し広げ」、人と人との「繋ぐ」力を育成する。そのために求められる「生成的知識力(未知の知識を獲得し、新しい知識を生み出す知識力)」を育成するために、以下の到達目標を設定している。</p> <ol style="list-style-type: none">(1) TOEFL (ITP) 550点、TOIEC 800点レベル以上の語彙、表現、構文・文法力をはじめとした英語運用能力を身につける。(2) TOEFL や TOEIC に出題されるレベル以上のリーディング教材を速く正確に読み解くことができる読解(精読・多読・速読)のスキルを習得する。(3) 精読・多読・速読の過程を通じて、論理的・科学的・批判的思考力を身につける。(4) 直読直解(リーディング)や直聴直解(リスニング)により得た情報に基づき、目標言語で論理的・科学的にコンテンツを再構築し、200語程度で説得力のあるエッセイ・ライティングを行ったり、3分程度の口頭発表(スピーキング)をしたりすることができる。(5) 他者との情報交換や意見交流を通じて、確実な情報選択・情報収集に基づき、科学的に情報処理を行い、挑戦的に意味情報を創造し、それらを論理的・科学的に再構築し情報発信することができる等、より高次元な意味交渉能力を身につける。(6) 他者とのインタラクションによる学修プロセス(collaborative learning や cooperative learning 等)を通じて、人間関係構築力や社会的学力を身につける。

● (Content-based Language Learning・専門複合科目) ●コンテンツ・ベースト、及び、トピック・ベーストによる言語学習・情報創造・情報発信の授業

教授法とその特徴

本科目では (1) 創造的変革や創造的文化を生み出す学力・知識力やスキルを育成し、(2) 世界的視野を持ち、世界に貢献することができる創造的な能力や態度を育成するための基盤を効果的に形成するために、アクティブ・ラーニングに基づく教育方法を重点的に実施・展開している。

そのために、授業外活動と授業内活動を明確に位置づけ、90 分の授業内活動の成果を最大化するために、高次元思考活動に基づく高度な社会的学習環境を構築するなど、開智・考究型の教育方法を実践している。

(1) 教育方法実践事例 1: アクティブ・ラーニングによる高次元思考学習

文化遺産の伝承や既有知識、世界観を習得したり利用したりするための知識力や、概念や事象に対する知識・理解・表現力という受動的学習や問題解決能力ではなく、未知・未経験な事態に対処する時に要求される知識生成力や問題設定・解決能力を常に追究する。そのために、最新のグローバル・イシューやカレント・トピックスを厳選しデータベース化されたクラウド型のリソースを教材として用い、高次元思考学習を推進する方略として、授業毎に英語 200 語程度のエッセイ・ライティングを実施している。

(2) 教育方法実践事例 2: ソーシャルメディアを利用した深化・交流学习

アクティブ・ラーニングによる高次元思考学習を可能とするために、クラウド型リソースデータベース (ABLish: 株式会社チエル) を利用し、コンテンツやトピックスに関する深化・交流学习を実施している。ABLish では学習者相互が自由にディスカッションを行ったり、他の学習者が作成投稿したエッセイを自由に閲覧しフィードバックを行ったり、また、フィードバックを求めたりすることが可能となっている。このような学習者相互のディスカッションの内容が、各コンテンツやトピックに関わる独自の「知のデータベース」として構築され学習の深化が図られている。

(3) 教育方法実践事例 3: ソーシャルメディアを活用した授業内相互交流学習・情報発信

クラウド型教材データベースを利用し、学習者相互が常時、情報の共有や交換を行っている。特に、各個人が実施したリサーチやインタビューの結果や新規情報を適宜アップデートし、学習者一人ひとりが適正な情報発信者となることができるよう支援している。また、教員が学生のエッセイや書き込みに対するフィードバックを適宜行うなど、創発的な学習ネットワーク環境を構築し、学習支援を実施している。

特定の回の授業の流れ

授業は通常 (1) Engage, (2) Study, (3) Activate という 3 つのモジュールにより構成・展開されている。

(1) Engage (方向付け・動機付けモジュール) 授業内 30 分

ソーシャルメディアを用い、学習するコンテンツやトピックスに関する導入やオリエンテーションを実施する。このモジュールでは、学習内容に関わる準拠体系 (frame of reference) を構築するとともに、最終タスクを提示し、期待される成果のイメージ化を図る。

(2) Study (基礎学習・理解深化学習モジュール) 授業外学習

ソーシャルメディアや ICT によるクラウド型学習教材データベースを用い、学習内容に関わる基礎学習や理解深化学習を、学習者相互のフィードバックをはじめとするインタラクションや情報共有・交換を通じて行う。このモジュールでは、タスクを達成するため

● (Content-based Language Learning・専門複合科目) ●コンテンツ・ベースト、及び、トピック・ベーストによる言語学習・情報創造・情報発信の授業

	<p>に必要な方略（留学生に対するインタビュー、該当インタビュー、リサーチワーク、質問紙調査等）を学習者自らがデザインするとともに、ソーシャルメディアを活用し、協同学習を展開する。また、収集した情報やとりまとめたエッセイ等はソーシャルメディア上で公開され、全学習者が共有する。なお、本モジュールは、授業内で実施する学習活動ではなく、授業外で実施することが求められる。</p> <p>(3) Activate（発展・応用学習モジュール）授業内 60分</p> <p>Study モジュールの学習成果に基づき作成されたエッセイに基づき、学習者の見解・意見や価値意識をプレゼンテーションするために最適な方法をデザインし、グループ内またはクラスで3分程度の口頭発表を行い、その成果についてディスカッションやピア・エバリュエーション等のフィードバックを行う。発表内容については、ビデオ撮影し、省察的に自己評価を行ったり、ビデオポートフォリオとして活用する。</p> <p>本科目においては、授業内活動を一層活性化するために、授業外活動として設定している留学生とのインタビュー等のタスクの経過や結果を、随時、ソーシャルメディア上で、履修生相互が共有したり、フィードバックや協議・議論をしたりすることができるようデザインされている。</p> <p>また、本科目においては、アクティブ・ラーニングによる授業展開の効果を最大化するために、以下に示すとおり、教室環境の整備・強化を図っている。</p> <p>(A) ブレーンストーミングのためのツールとして、ホワイトボードと iPad を活用 (B) アクティブ・ラーニングのツールとして、ソーシャルメディアの機能を備えたクラウド型学習教材データベースである ABLish（株式会社チエル）を活用 (C) 学習成果をビデオポートフォリオとして録画・記録するために iPad を活用</p>
<p>評価方法</p>	<p>(1) 基礎学習内容については、クラウド型学習教材データベースを用いた理解度確認問題や、語彙テスト等により診断的に測定・評価している。</p> <p>(2) 高次元思考学習の成果については、毎回ソーシャルメディアを活用して提出されるエッセイや投稿されるディスカッションの内容・頻度により形成的に測定・評価している。</p> <p>(3) アクティブ・ラーニングの学習成果については、授業内でのプレゼンテーションや発表を相互評価したり、ビデオ撮影しビデオポートフォリオとしてまとめたりするなど、形成的・総括的に評価している。</p>
<p>学習成果</p>	<p>(1) アクティブ・ラーニングにより、自らの学習を自らがデザイン（立案・企画）し、実施し、その結果を集約・発表することができるようになり、学生の自律的学習力が育成できている。</p> <p>(2) ソーシャルメディアを活用した協働学習ネットワークの中でともに学び高め合うことができるようになり、社会的な学力が育成できている。</p> <p>(3) ソーシャルメディアを利用した協働学習ネットワークにより、自他の学習成果や学習結果を客観的、間主観的に評価・判断し、より高次元な思考や価値意識を構築することができるようになっている。</p>

● (Content-based Language Learning・専門複合科目) ●コンテンツ・ベースト、及び、トピック・ベーストによる言語学習・情報創造・情報発信の授業

担当教員のこの授業に対する思い

アクティブ・ラーニングとは、学習形態や反転学習といった学習方法等を示すものではなく、いかに学習者の「脳を活性化させる」のかに尽きると考える。

従来の、知識の蓄積（教える）を中心概念とした「教授・学習」型と、創造力の開発（才能を引き出す）を中心概念とした「開智・考究」型の学習を同時並行的に実施することができる教育方法を研究・開発し、実践することが望まれる。

活性化された脳内や教室内、ソーシャルメディア内では、形式情報（ローコンテキスト）から、「おどろき」があり新しい何か「見えてくる」意味の生成や新しい概念の創造が行われる意味情報（ハイコンテキスト）が継続的に作り出されてくる。

すなわち、ソーシャルメディアを活用することにより、物理的・空間的・時間的な隔たりを超え、人と人、情報と情報がつながり、新しい知識や価値・文化を生み出す知識力としての「生成的知識力」が育成されるものと考ええる。

アクティブ・ラーニングにおける最も重要な教員の役割・責任は、学生の脳を「活性化」させる状況や仕掛けを、いかにデザインするののかということである。その意味において、インターネット等のソーシャルメディアの活用は効果的である。

授業風景



ブレインストーミング／コラボラティブ・ラーニング／プレゼンテーション

その他の特記事項

本科目の受講生が、留学生にインタビューをしたり、ディスカッションをしたりする中で、情報収集を行ったり、情報交換を行ったりする等の授業内容や教育方法等についてNHK大阪のローカルテレビ番組から追跡取材を受け、6月に一部放映された。

プロジェクトベース設計演習

九州産業大学

情報科学部情報科学科

稲永健太郎、安部恵介、石田健一、下川俊彦、成凱、仲隆
澤田直、古井陽之助、安武芳紘、神屋郁子、前田洋征

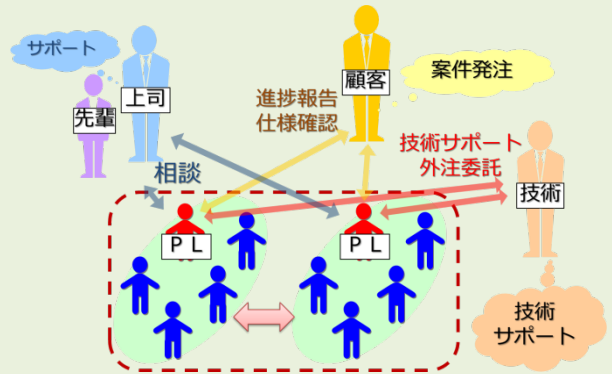
受講生数	84名
科目の位置づけ	<p>本学部・本学科の教育研究理念は「社会と人間のための IT」である。本学部・本学科では、「情報科学・情報技術の基礎を確実に身につけ、高い倫理観をもった職業人として社会に貢献する人材の育成」と「社会の仕組みや人間の特徴を知って情報技術を適切に適用できる能力をもった人材の育成」という二大教育目標を掲げ、情報科学・情報技術の教育を行い、これからの情報社会を支える人材、特に、情報に対する倫理観や責任感を持ってこれからの情報技術の発展に貢献できる技術者、具体的には、情報システム開発、情報システム管理、組込みシステム、ネットワークシステム、情報メディア・CG・コンテンツ開発等の各分野で活躍できる情報技術者を育成している。</p> <p>本科目は、本学部・本学科にある 2 つのコースのうち、日本技術者教育認定機構（JABEE：Japan Accreditation Board for Engineering Education）の技術者教育プログラム（情報および情報関連分野）として認定されている「情報科学総合コース」の必修科目として 3 年後期に実施されている。学生は、3 年次までに他の科目で学修した知識・技能をもとに本科目を受講する。</p> <p>本科目は、JABEE 基準の 1 つである“種々の科学、技術および情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力”および本学部の学習・教育目標の 1 つである“情報科学・情報技術に関する重要な課題に対して、他者と協力し、納期・費用・品質などを考慮して、それまでに学習した知識・技術を応用する方法を学ぶ。”をカバーする位置づけの科目である。</p>
科目の到達目標	<p>本科目では、以下のような到達目標を掲げている。</p> <ul style="list-style-type: none">・システム開発プロジェクトを疑似体験させ、品質・納期・コストを意識したプロジェクト管理の実際およびコミュニケーションの重要性を理解する。・プレゼンテーションの能力ならびにデザイン（設計）能力を高める。・組込みソフトウェア開発あるいは Web アプリケーション開発の製品設計技術を理解・習得（実装・テスト等）する。

●専門科目●システム開発プロジェクトの疑似体験

教授法とその特徴

本科目の教授法とその特徴を以下に示す。

- ・ 現役の情報技術者をインストラクタに迎え、産学協同でのプロジェクト管理教育を実践している（“逆”インターンシップ）。
- ・ 複数の演習教材（組込みシステム系、Web アプリ系）に対応できる。
- ・ 複数班構成の体制でのプロジェクト管理・運用を疑似体験させる。
- ・ 各班は 5～6 名の受講生で構成され、各メンバーは、PL（プロジェクトリーダー）、開発リーダー、進捗、構成、品質、経費といった役割を持って活動する。なお平成 26(2014)年度は 14 班、84 名であった（右下図参照）。
- ・ 各班には、上司役（企業技術者、教員）および先輩役（上級生）が割り当てられる。また、顧客役や技術サポート役があり、各班の活動に適宜対応する。なお、平成 26 (2014) 年度は、教員は 11 名、上級生は 14 名、企業技術者が各回授業に 2～5 名程度であった（右図参照）。



- ・ 複数回の講評および振り返りの機会を設け、教育目標を周知および教育効果を浸透させる。
- ・ 企業関係者の立会いの下で成果報告会を実施し、プレゼンテーションをさせる。
- ・ 毎回の授業終了後、スタッフによる終了ミーティングを実施し、授業の改善を図る。
- ・ 本科目の学習・教育到達目標と対応させた第三者機関（独立行政法人情報処理推進機構 IPA）提案のコンピテンシー評価基準をカスタマイズし導入している。
- ・ 過去の本科目で受講生が作成した独自の業務システムや Google Apps 等の各種 IT システム・サービスを活用している。

特定の回の授業の流れ

本科目の特徴の 1 つである、講評・振り返りを含む回の授業の流れを以下に示す。

1. 授業内容説明：授業冒頭で前回までの復習や今後のスケジュール等について連絡事項を受講生に伝える。
2. ミニ講義：作業に必要な知識を複数回に分けて講義する。名刺交換の方法等、社会人としてのマナーの話も含まれる。
3. “朝” ミーティング：班ごとにプロジェクトリーダーを中心に前回までの作業進捗状況や今回の作業予定等を確認し、班内での意識合わせを行う。
4. 作業：“朝” ミーティングの内容にしたがい、各人が作業を行う。設計書やプログラム、プレゼン資料の作成などがその主たる内容となる。
5. 顧客会議：定期的に顧客（役のスタッフ）との会議を行う。班としての作業進捗状況の報告や顧客への相談等が会議の主たる内容となる。
6. 講評・振り返り：中間および最終講評として、各班のプロジェクト運営について講評を行う。その講評内容をもとに、各班でその振り返りと今後の作業の進め方について検討を行う。
7. 日報作成：過去の本科目で作成された業務システムを使って、その回の授業での作業

●専門科目●システム開発プロジェクトの疑似体験

	<p>報告書を作成する。</p> <p>8. (スタッフのみ参加) 終了ミーティング：授業終了後、その回の授業における受講生の活動状況や問題点等をスタッフ間で共有、改善策を検討する。30分～1時間程度毎授業後に実施する。</p>
評価方法	<p>本科目では、科目の学習・教育到達目標に対応すべくカスタマイズさせた第三者機関 (IPA) 提言のコンピテンシー評価を導入し、自己評価の形で受講前後の変化を学生に確認させている。具体的な評価項目を以下に示す。</p> <ul style="list-style-type: none">・ コミュニケーション力：傾聴力、読解力、記述力、議論力・ 問題解決 (デザイン) 力：課題発見、課題分析、論理的思考・ 組織的行動能力：役割認識 (チームワーク)、主体性、協働・ 自己実現力：目標設定、自己管理、達成志向・ 多様性の理解：グローバルコミュニケーション力、知識獲得力、学習、応用力、情報整理力
学習成果	<p>本科目を通しての学習成果および受講生のコメントを以下に示す。</p> <ul style="list-style-type: none">・ システム開発プロジェクト管理の実際をより深く理解できる。・ チーム内／対顧客会議および成果報告会に参加することで、コミュニケーション・プレゼンテーションの能力、およびシステム開発におけるデザイン (設計) 能力を向上できる。・ 関連する他の授業への参加のモチベーションを高められる。・ コンピテンシー評価を実施することで、受講生および学生スタッフがどのような自己成長をしたのかを確認させることができる。・ 組込みシステム技術者あるいは Web アプリケーション開発者への志望者を増加させられる。・ 本科目を受講後、その組込みシステム開発の経験を生かし、学生チームが各種ロボットコンテストに出場し、ET ロボコン 2013 全国大会への出場やスマートデバイス GP 2014 全国大会で企業賞を受賞するなどの成果を収めている。・ 受講することによって、就職したときの仕事の進め方が体験でき、就職活動する際に有利になります。(受講生コメント)
担当教員のこの授業に対する思い	<p>本科目では、情報技術者を育成するにあたり、教員による講義や演習、実験だけでは、システム開発現場におけるプロジェクト管理の実際を理解させ、かつ必要なスキル (いわゆる社会基礎力を含む) を習得させることが容易ではない。本学部・学科として、技術者および社会人としての実践力を学生に身に付けさせることを常に考えている。そこで、地場 IT 企業の現役技術者をインストラクタとして迎え、産学協同でのプロジェクト管理教育を実践している。平成 16 (2004) 年度以降、授業内容を改善しながら現在に至るまで毎年度継続して実施している。この授業の性質上、大学教員のみならず企業の協力が不可欠であり、長年に渡る企業からの協力がなければ教育効果を得ることはできないと考える。引き続き、産学協同の体制を堅持しながら、さらなる授業改善を進めていきたい。</p>

●専門科目●システム開発プロジェクトの疑似体験

授業風景

顧客ミーティング
(組込み)



開発作業 (Web)



この事例に関する報告書、ウェブ
サイト等 (ない場合は省略可)

- ・総務省「社会人基礎力を育成する授業 30 選」実践事例集
http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/25fy_chosa/Kiso_30sen_jireisyu.pdf
- ・経済産業省 産学実践的 IT 教育レポート
http://www.meti.go.jp/policy/it_policy/it_jinzai/Sangakureport-honpen.pdf
- ・経済産業省産学実践的 IT 教育レポート 個別事業詳細 (資料編)
http://www.meti.go.jp/policy/it_policy/it_jinzai/Shiryou1.pdf
- ・産学協同実践教育「プロジェクトベース設計演習」における教育改善、私立大学情報教育協会誌「大学教育と情報」、Vol.21、No.1 (通巻 138 号)
http://www.juce.jp/LINK/journal/1203/pdf/03_03.pdf
- ・産学連携実践教育「プロジェクトベース設計演習」の取り組み、情報処理学会会誌「情報処理」、Vol.53、No.7
https://ipsi.ixsq.nii.ac.jp/ej/?action=repository_uri&item_id=82522
- ・双方向型産学連携実践教育、情報処理学会論論文誌 Vol.48、No.2
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006207804>
- ・産学協同実践教育「プロジェクトベース設計演習」、PBL シンポジウム～産学連携によるプロジェクト型 IT 教育の普及に向けて～ PBL 教育への取り組み事例 1 (事例報告)
<http://grace-center.jp/wp-content/uploads/2012/05/talk4.pdf>
- ・産学協同実践教育「プロジェクトベース設計演習」高度化の取り組み”, 情報処理学会研究会報告, 2009-IS-107 <http://ci.nii.ac.jp/naid/110007160974>
- ・「プロジェクトベース設計演習」経済産業省“社会人基礎力を育成する授業 30 選”に選出、九州産業大学 情報科学会誌、13 巻 1 号
<http://www.is.kyusan-u.ac.jp/journal/j2014/05Inenaga.pdf>
- ・情報システム教育コンテスト ISECON2012 優秀賞を受賞、九州産業大学 情報科学会誌、12 巻 1 号 <http://www.is.kyusan-u.ac.jp/journal/j2013/05Yasutake.pdf>
- ・「プロジェクトベース設計演習」(社) 情報処理学会情報システム教育コンテスト ISECON2011 “審査委員特別賞”を受賞、九州産業大学 情報科学会誌、11 巻 1 号
<http://www.is.kyusan-u.ac.jp/journal/j2012/21inenaga.pdf>

特別実習 A(3年次前期) 特別実習 B(3年次後期)

九州産業大学

芸術学部デザイン学科

青木幹太

受講生数	3年次生：31名
科目の位置づけ	芸術学部デザイン学科は、本学の建学の理想である「産学一如」に基づき、社会が抱えるさまざまな問題を自ら発見し解決することのできるデザイナーの養成を目標としている。本学科では1～2年次にデザインの基礎知識や能力等の修得を図り、3年次より当該科目として本学の工学部、情報科学部や経営学部など他学部との連携、地域の企業との連携によるモノづくりに重点を置いたプロジェクトワークを取り入れ、実践的なデザイン能力とともに社会の現場で通用するマインド、コミュニケーション力を修得する。
科目の到達目標	履修学生に提示する具体的な目標は、プロジェクト活動の過程で成果物に対して、段階的に連携先（企業や他学部など）の了承を得ること及び一般への公開・展示にあたって、公開に足る品質レベルを確保することである。教員は履修学生に提示した目標を達成するための指導、助言を行い連携先との調整などを通して、学生が主体的に学ぶ場を提供し、最終的に①実践力のある専門知識、技術を修得する、②社会が求めるコミュニケーション力を修得することが科目の到達目標である。
教授法とその特徴	授業は、用意したプロジェクトの中から履修する学生の志向に応じて選択できることが特徴である。将来、自動車や機械のデザインを志向する学生は、工学部や情報科学部と連携して実施する「自動車開発プロジェクト」や「ロボット開発プロジェクト」などを選択する。家具デザインを志向する学生は、家具産地大川の企業と連携した「家具開発プロジェクト」、地域の伝統産業に関心がある学生は、福岡の伝統産業である博多織や博多人形の製造・販売企業と連携した「伝統産業振興プロジェクト」、商品パッケージやパンフレットなどの販促ツール等に関心がある学生は、地域の食品、雑貨を製造・販売する企業と連携した「地域企業振興プロジェクト」など地域企業と連携した主に商品企画や開発に主眼を置いたプロジェクトの中から選択する。本授業は履修した学生3～4人を中心に、他学部学生、卒業研究で上記プロジェクトに取り組む4年生、連携先の企業スタッフによるグループワークであり、それぞれのプロジェクト毎に設定された課題に沿って、「前期：市場調査→情報収集→コンセプト発表・協議→課題解決案の検討・協議→プロトタイプモデル制作→中間発表 後期：最終案の提案・協議→試作→展示・公開による社会的評価」のプロセスを踏む。企画段階から具体的な課題解決まで、学年や分野の異なる学生、企業現場のスタッフとの協議や共同作業は、授業時間内および放課後にも及ぶ（写真1）。前後期合わせて30回の授業では、数回、全プロジェクトの進捗状況報告の時間を設け、履修学生が情報を共有し、お互いのプロジェクトに関心を持つよう配慮している。企業と連携したプロジェクトでは、企業スタッフが学生との協議や共同作業を通して、積極的に教育に参加してもらっている。プロジェクト活動の成果は、年度末の2月から3月にかけて、福岡市内の集客力のある商業施設の一部を借りて、展示・公開し、展示品に関するアンケート調査を実施するなど広く一般の方々から意見を聴く機会を設けている（写真2）。

●実習科目●学生の志向に応じて様々なプロジェクトを用意、グループで実施、成果報告

<p>特定の回の授業の流れ</p>	<p>プロジェクト型デザイン教育による授業を円滑に推進するため重要となるのは、導入時（初回）、中間時（コンセプト発表など）、最終時（最終デザイン）の3回の授業である。</p> <p>1) 導入時：企業と連携したプロジェクト活動では、履修する学生、参加する企業スタッフ全員によるキックオフ会議を行う（写真3）。授業の方針や目的、課題を共有し、最終目標に向かって活動をスタートすることで学生の主体的意識は確実に向上する。キックオフ会議では、プロジェクトのメンバーやリーダー、活動内容や日程を決める。</p> <p>2) 中間時：プロジェクトメンバー全員が参加し、設定された課題についてグループ毎に解決の方向性やアイデアをまとめ、プロジェクトメンバー全員が参加する中間報告会で発表する。企業と連携したプロジェクトでは、企業側から厳しい意見、要望が出されることもあり、社会の実態を迫体験するとともに通常の授業と異なり安易な妥協ができないことを実感する。</p> <p>3) 最終時：プロジェクト活動の成果は、連携した企業による商品化の検討、集約力のある商業施設での展示・公開等の要件から、学生達は成果物を高いレベルでまとめあげようと努力する。そのためには専門分野の高度な知識や技術を活用する必要があり、授業では主体的に学習活動に取り組む。2015年度より展示・公開に合わせて、プロジェクト活動の成果物を学生自ら展示会場で販売する機会を設け、市場ニーズとの整合性や乖離について分析・評価することを実施している（写真4）。</p>
<p>評価方法</p>	<p>①中間時、最終時の発表内容について、5段階評価を行うとともに、連携先の企業スタッフの意見を加味した活動評価を行う。</p> <p>②成果物については、商業施設での公開・展示の際に、来場者を対象に市場性や好み等のアンケート調査を行い、得票を集計して達成度を数値化している（写真5～7）。</p>
<p>学習成果</p>	<p>プロジェクト型デザイン教育により、デザインの専門的な知識や技術の修得とともに、それをどのように実践に生かしていくかという応用力が向上する。特にグループワークや成果物の公開・展示、販売活動を通して、社会人として必要な言語、非言語によるコミュニケーション力が飛躍的に向上する。具体的な学習成果としては、授業履修学生の4年次における就職内定率は、学内平均を大きく上回っている。</p>
<p>担当教員のこの授業に対する思い</p>	<p>2005年頃を境に、デザインを学ぶ学生の志向の多様化が進み、志向に応じた授業プログラムの開発が教員の重要な課題になっている。本授業は1年から2年次にデザインの基礎を学び、3年次のプロジェクト型デザイン教育で実践力を修得するという考え方から、他学部との連携、地域企業との連携による多様なプログラムを開発し、学生自らが学ぶ場を提供している。企業との連携プロジェクトでは、履修した学生は企業で実際に行われている「企画、デザイン、開発、生産、販売」の実務経験を通して、地域が期待する幅広い能力を持った人材育成に繋げ、企業は大学が保有する知的・人的資源を活用して競争力のある商品を開発するなど、双方の便益は大きいと考えている（図1）。</p>

●実習科目●学生の志向に応じて様々なプロジェクトを用意、グループで実施、成果報告

プロジェクト型デザイン教育

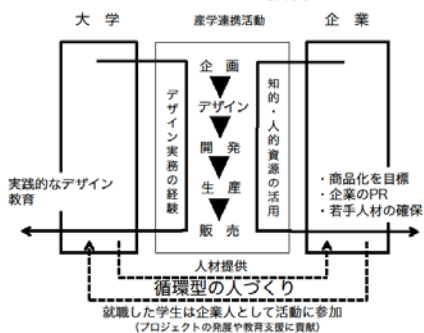


写真1：学生と企業スタッフによる協議



写真2：成果物の展示・公開（2015年2月19日から3月4日：天神イムズ B2F イムズプラザ）



写真3：プロジェクト型デザイン教育の導入時のキックオフ会議



写真4：展示会での商品販売

授業風景

●実習科目●学生の志向に応じて様々なプロジェクトを用意、グループで実施、成果報告

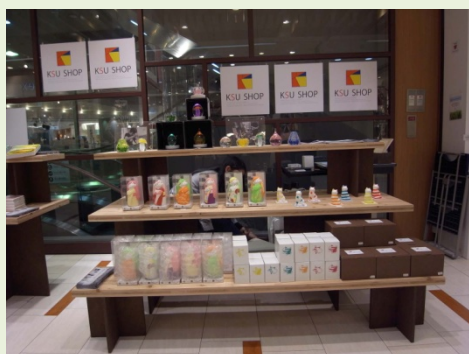


写真5：2015年プロジェクト活動の成果物 家具



写真6：2015年プロジェクト活動の成果物 3輪バイク



写真7：2015年プロジェクト活動の成果物 博多人形



●実習科目●学生の志向に応じて様々なプロジェクトを用意、グループで実施、成果報告

<p>この事例に関する報告書、ウェブサイト等</p>	<p>1) 青木幹太, 他: プロジェクト型デザイン教育の実践 -大川家具工業会との産学連携活動の推移とその成果-, 第 62 回日本デザイン学会春季研究発表大会, デザイン学研究 p348-349,2015.6</p> <p>2) 青木幹太, 他: プロジェクト型デザイン教育の実践 -地域産業プロモーションを事例として-, 第 61 回日本デザイン学会春季研究発表大会, デザイン学研究, p50-51, 2014.7</p>
<p>その他の特記事項</p>	<p>第 61 回日本デザイン学会春季研究発表大会において、「プロジェクト型デザイン教育の実践-地域産業プロモーションを事例として-」(発表: 青木幹太) が、グッドプレゼンテーション賞を受賞。</p>

●専門科目（演習系） ●学生が仮想企業を設立し、新商品開発・企業交渉・商品化を行う

電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ（1年次開講：前・後期）

電子商取引演習Ⅲ（2年次開講：通年）

共愛学園前橋国際大学

国際社会学部／国際社会学科

兼本雅章／村山賢哉

受講生数	29名 ※2014年度実績 ・電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ（1年生…17名／2年生…3名） ・電子商取引演習Ⅲ（2年生…6名／3年生…3名）
科目の位置づけ	本学のDP（ディプロマ・ポリシー）における「1. 地域社会の諸課題への対応能力」「3. 問題を発見し解決するための分析能力・実践的技能」に関連する科目である。実践を通じた科目のため、「情報倫理」「経済学」「経営学」「マーケティング」「簿記」「ビジネスコミュニケーション」などの講義系科目の内容とリンクし、この授業で学んだことの理解を深められるようになっている。また、「電子商取引演習Ⅲ」（2年次開講：通年）は、「電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ」（1年次開講：前・後期）の継続科目であり、「電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ」の受講生にとっては、1年間の経験を活かせる場となっている。
科目の到達目標	11月に行なわれる仮想企業の全国大会『トレードフェア』に参加し、成果を発表することを第1の目標とする。さらに、世の中で売れる新商品を開発することを第2の目標とし、それをどのように売るかを考え、商品化していくことを第3の目標とする。 また、実際に企業・自治体などと連携しながら進めていくため、その関わりを通して、実社会で必要とされる能力を把握し身につけていくことや、SNS形式の『Youth Enterprise』で定期的に情報発信を行っていくため、情報化社会における社会への情報発信力を身につけていくことも目標としている。
教授法とその特徴	1年間という授業期間の中で、学生が仮想企業を設立するところから始まり、地元企業や自治体・団体などとの交渉・提携、開発会議を重ねての商品開発など、すべてのプロセスが学生主体で行われる。したがって、教員は従来の講義スタイルのように「教える」という役割ではなく、各仮想企業の活動を援助するファシリテーター（支援者）の役割を果たすことになる。 また、本授業では「電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ」と「電子商取引演習Ⅲ」の授業を同じ時間に行っている。したがって、「電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ」の受講生（1年目）と「電子商取引演習Ⅲ」の受講生（2年目）が一緒に仮想企業を運営したり、評価し合ったりすることになる。「電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ」の受講生にとっては、すでに1年間の活動を経験した先輩が同じ授業内・仮想企業内にいることによって、仮想企業内での情報共有・協働の仕方を学ぶことができる。一方、「電子商取引演習Ⅲ」の受講生にとっては、「電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ」で培った経験やノウハウを活かし、さらに理解を深める場となっている。 さらに、この授業ではティーチングアシスタント（TA）を採用し、受講生のサポートに従事させている。TAは、その多くが過去に『トレードフェア』で最高位賞を受賞し、商品

●専門科目（演習系） ●学生が仮想企業を設立し、新商品開発・企業交渉・商品化を行う

化に成功している先輩たちであるため、彼らをベンチマーキングできることも、学生の能力向上に大きく寄与している。

使用教材は、NPO 法人アントレプレナーシップ開発センターが提供する教育プログラム『Youth Enterprise』を利用しており、その全国大会が『トレードフェア』である。2013年度までは、『バーチャルカンパニー』という教材名であったが、時代に合わせた取組みへの内容変更とともに名称も変更された。

【『トレードフェア』用ブース練習】(21 回目 (10/31) および 23 回目 (11/14))

※内容

『トレードフェア』本番に向けて、対面販売の模擬体験を本番を想定した審査項目をもとに2回にわたって行う。

※目的

<共通>

- ・できていること・できていないことの現状把握
- ・グループ内の情報共有やグループとしてのまとまり（チーム力）の重要性の認識
- ・商品を「売る」ということはどういうことかの認識
- ・学生間の相互評価、審査員からの外部評価をもとに本番に向けて取組み方のブラッシュアップ

<21 回目の特徴>

- ・審査員役は主に学生（経験者・希望者）
- ・グループ内の中心学生は審査員役に回し、残ったメンバーとの知識差など、グループとしての問題点を全員に気づかせる

<23 回目の特徴>

- ・前回のブース練習からどれだけ改善されたかの把握
- ・審査員役は1回目の学生（経験者・希望者のみ）に加え、教職員や学外からも社会人を呼ぶことで、より本番に近い状況でのシミュレーション

※授業の流れ

1. 仮想企業ごとにブースを準備（授業開始前のお昼休みから）
2. ブース準備完了（授業開始5分後まで）
3. 審査員役に評価シートに関する説明（授業開始から10分）
4. ブース練習（1時間）
5. ブース片付け（10分）
6. 総評と評価シート返却（10分）
7. 仮想企業ごとに振り返り（授業時間外）

特定の回の授業の流れ

教員は授業中の活動の様子を見ながら、授業への積極性、活動への貢献、能力の向上度合いといった学生自身の観点と、グループとしてどのくらい力を発揮できているかという仮想企業全体としての観点から、グループの進捗状況（20%）とグループワークへの参加状況・貢献度（80%）で総合的に評価する。

これには、学生自身が3回行う、教員が作成した評価シートを使った自己評価（個人・グループ）と仮想企業内の他のメンバーについての評価も、担当教員によるグループ面接を通して反映される。

評価方法

●専門科目（演習系） ●学生が仮想企業を設立し、新商品開発・企業交渉・商品化を行う

学習成果

※2014 年度実績

【『トレードフェア』の結果】

※出場 6 グループのうち、4 グループが受賞。

『La beauté』…京都府知事賞（公共の視点で社会貢献度が最も高かったチーム：最高位賞）
 ／『上州麦翔屋』…京都工業会賞（ものづくり（製品）において新しい発想を提案したチーム）
 ／『桑工房』…京都中小企業家同友会賞（新規性・独自性の高いビジネスモデル（サービス）を提案したチーム）
 ／『切麺亭鶴林』…スチューデント賞（トレードフェアの参加者達が選んだベストチーム）

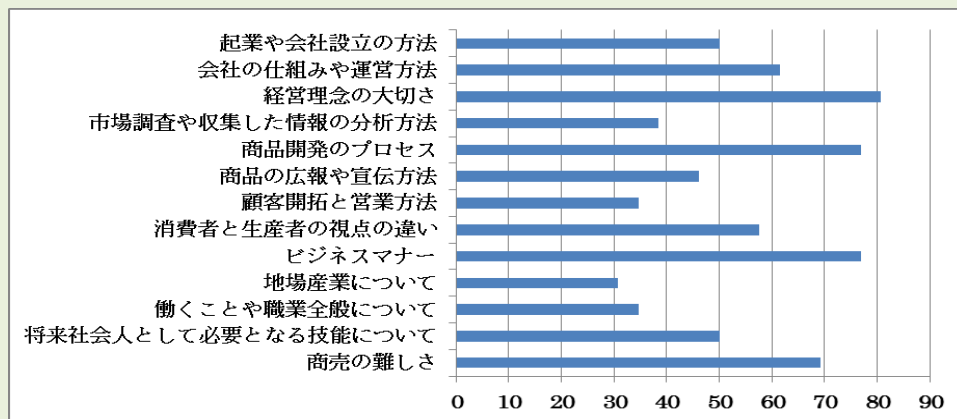
【商品化】

※『切麺亭鶴林』が開発した「幸福麺」が株式会社館林うどんより商品化を予定。

【NPOアントレプレナーシップ開発センターのアンケートより（26名・複数回答）】

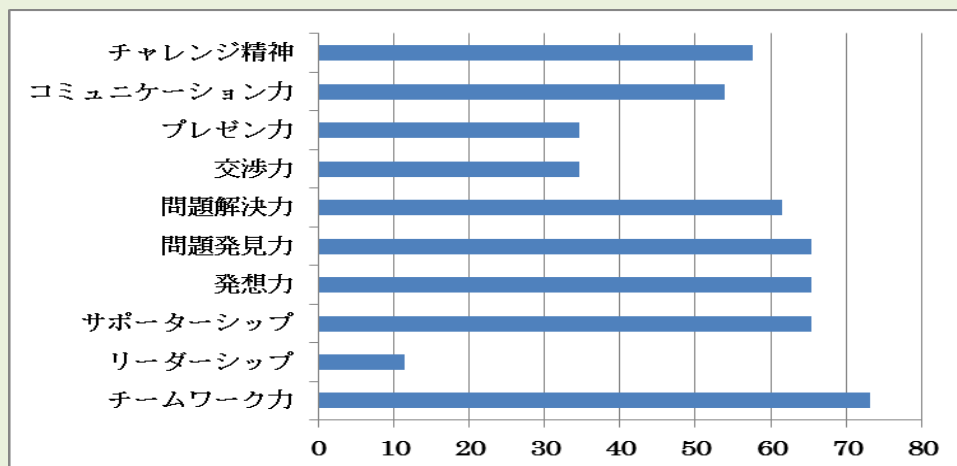
※授業で理解が深まったこと（該当者／26名×100（%））

「経営理念の大切さ」「商品開発のプロセス」「ビジネスマナー」は 3/4 以上の受講生が理解が深まったとしている。同じ教材を使用している他大学と比較しても 1 項目を除く、ほぼすべての項目で上回っており、「ビジネスマナー」「経営理念の大切さ」は 25 ポイント以上も差がある。



※授業を通して以前よりも能力が向上したと思うこと（該当者／26名×100（%））

「チームワーク力」が最も高く、「問題発見力」「発想力」「サポートシップ」がそれに続いている。他大学と比べ、「チャレンジ精神」「交渉力」「問題発見力」が 10 ポイント以上高いという傾向がある。「リーダーシップ」が最も低い、それは他大学も同様である。



・これらのアンケート結果は、前年の 2013 年度と比べても、ほぼすべての項目で伸びており、授業自体も改善・進展していると考えられる。

●専門科目（演習系） ●学生が仮想企業を設立し、新商品開発・企業交渉・商品化を行う

担当教員のこの授業に対する思い

従来型の座学中心の学びよりも、学んだ知識を失敗も含めた実際の経験を通して考え、知恵に変えるような学びをできるだけ学生たちを社会に出して行いたいという大学としての考えが背景にある。その教材候補としてあがったのが『バーチャルカンパニー』であり、2003年度の試験導入を経て、2004年度に「電子商取引演習Ⅰ・Ⅱ」（1年次/前・後期）を開講、2007年度には「電子商取引演習Ⅲ」（2年次/通年）を開講し、現在に至る。

地元企業と連携した商品開発を通して、チームワーク力やコミュニケーション力、リーダーシップ力、問題解決能力、判断力、責任感など、これから社会で必要とされる様々な基礎能力を身につけてもらいたいと思っている。大学に入学したばかりの1年生にとって、地元企業と連携して行うこの授業は、一般の授業よりもかなり負荷がかかる。しかしながら、積極的にこの授業に参加した学生の成長は著しい。その成長を促すために重要なことは、TAを含めた学生内で様々な課題に向き合い解決していくこと、教員はファシリテーター（支援者）に徹することであると考えている。

※ブース練習の様子（23回目）



※『ユース・エンタプライズ トレードフェア』の様子



授業風景



・兼本雅章(2006)「『バーチャルカンパニー』を用いた授業実践」『共愛学園前橋国際大学論集』第6号, pp.103-115

・共愛学園前橋国際大学(2008)「仮想企業プログラムを使った地元企業との産学連携」『視聴覚教育』第62巻4号, pp.52-53 (第8回インターネット活用教育実践コンクール/イン

●専門科目（演習系） ●学生が仮想企業を設立し、新商品開発・企業交渉・商品化を行う

この事例に関する報告書、ウェブサイト等

ターネット活用教育実践コンクール実行委員会賞受賞)

・兼本雅章(2009)「商品化成功の過程～カップ麺共同開発を中心に～」『共愛学園前橋国際大学論集』第9号, pp.13-25

・兼本雅章(2011)「仮想企業プログラムによる地域と連携した実践型人材育成」『経済教育』第30号, pp.171-175

・兼本雅章(2011)「地域連携の実践型アントレプレナーシップ教育の成果－4年間を通じた人材育成の取り組み－」『Mutual Online System for Teaching & Learning』

(<https://most-keep.jp/keep25/toolkit/html/snapshot.php?id=22123112643252>)

その他の特記事項

※通算実績

【『トレードフェア』の結果】

2005年度から大学・高専・専門学校部門での最高位賞を6年連続受賞した後、2011年度からは4年連続で総合1位の京都府知事賞を受賞。その他の賞も合わせると、10年間で述べ29個の賞を受賞。

【商品化】

2007年3月に「冷しシリーズ」が初の商品化に成功。その後、ほぼ毎年のように学生のアイデアが商品化されており、予定の「幸福麺」を含めると9品目14種類になる。

特殊講義 I (企業発展メカニズム分析)

特殊講義 M (企業発展実態分析)

近畿大学

経営学部 / 経営学科

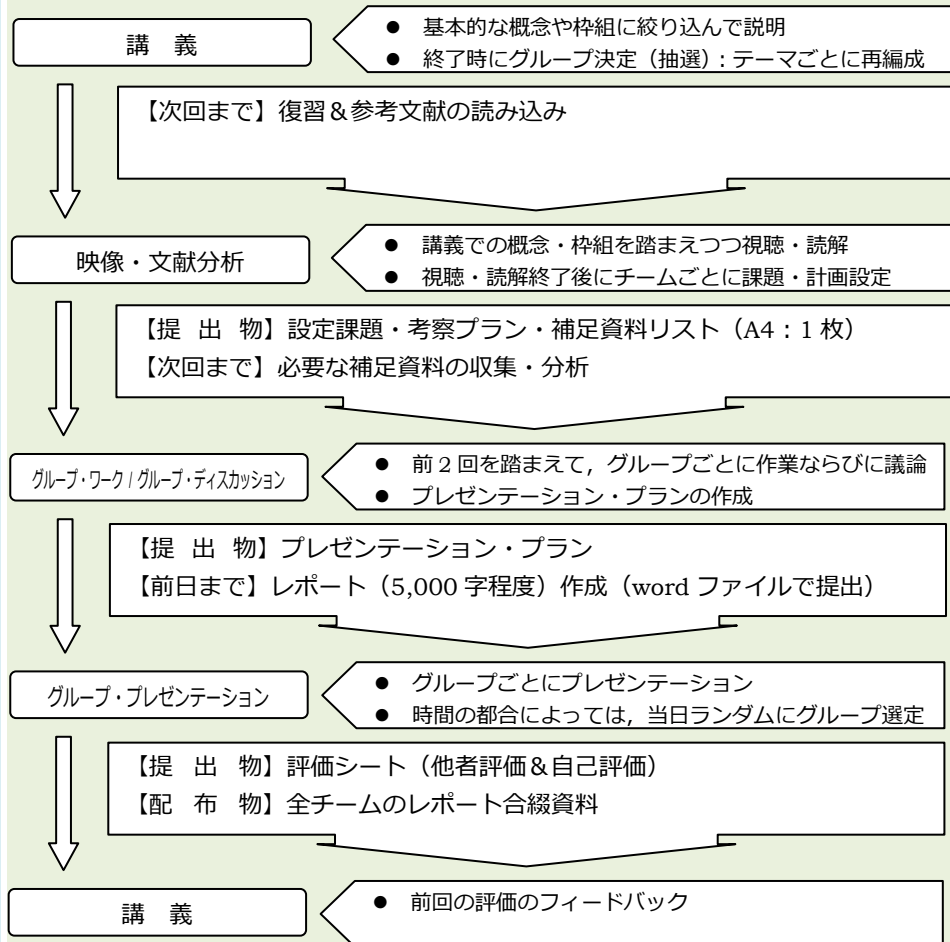
山縣 正幸

受講生数	特殊講義 I : 30 名, 特殊講義 M : 20 名
科目の位置づけ	企業行動論 I・II の講義内容 (関連する専門科目も含む) をベースとして, 実際に事例分析をおこない, さらにグループディスカッションなどを通じて, 分析能力や論理的思考・執筆能力を身につける発展的科目として位置づけられる。
科目の到達目標	<p>【特殊講義 I】</p> <ol style="list-style-type: none">企業行動論 I での講義内容を踏まえて, 具体的な企業の事例を分析する能力を身につける。企業の事例分析をベースに, どうすれば「企業発展が可能になるのか」という構想形成能力を身につける。グループワーク形式による思考能力を身につけるとともに, 必要な文献・データ・資料などを探索し, それを分析・構想形成につなげる能力を獲得する。 <p>【特殊講義 M】</p> <ol style="list-style-type: none">企業行動論 I・II での講義内容を踏まえて, 具体的な企業の事例を分析する能力を身につける。企業の事例分析をベースに, 「なぜ」「どうすれば」という分析・構想形成能力を身につける。グループワーク / グループディスカッション形式による思考能力を身につけるとともに, 限られた時間や情報, 資料をもとにして分析・構想形成・プレゼンテーションにつなげる能力を獲得する。
教授法とその特徴	<p>【特殊講義 I】</p> <p>本科目では, 「知識の活用」という点に比重を置く。そのため, 企業行動論 I で説明した概念を軸として, 実際の企業などの <u>事例やデータの探索</u>, それらを駆使した <u>分析</u>, さらに報告のための <u>論理的構成</u> など, 社会に出てから必須となる基礎能力を, グループワークを通じて身につけることに主眼を置いている。</p> <p>【特殊講義 M】</p> <p>本科目では, より高度な <u>論理的思考能力</u> とともに, <u>討論能力</u> を高めることに比重を置いている。加えて, 論理的な文章執筆能力を高めるため, <u>テーマごとに事前と事後にエッセイ (小論文) の提出</u> を義務づけている。事前エッセイは討論する際の事前思考として, 事後エッセイは討論を踏まえて論理の磨き上げとして, それぞれ狙いを定めている。</p> <p>【共通事項】</p> <p>担当者は, 受講者からの質問に対応するのみならず, 議論の方向調整や文章の添削などを通じた能力育成に注力している。固定的な正解ではなく, 論理的な整合性や構成能力の育成を重視している。</p>

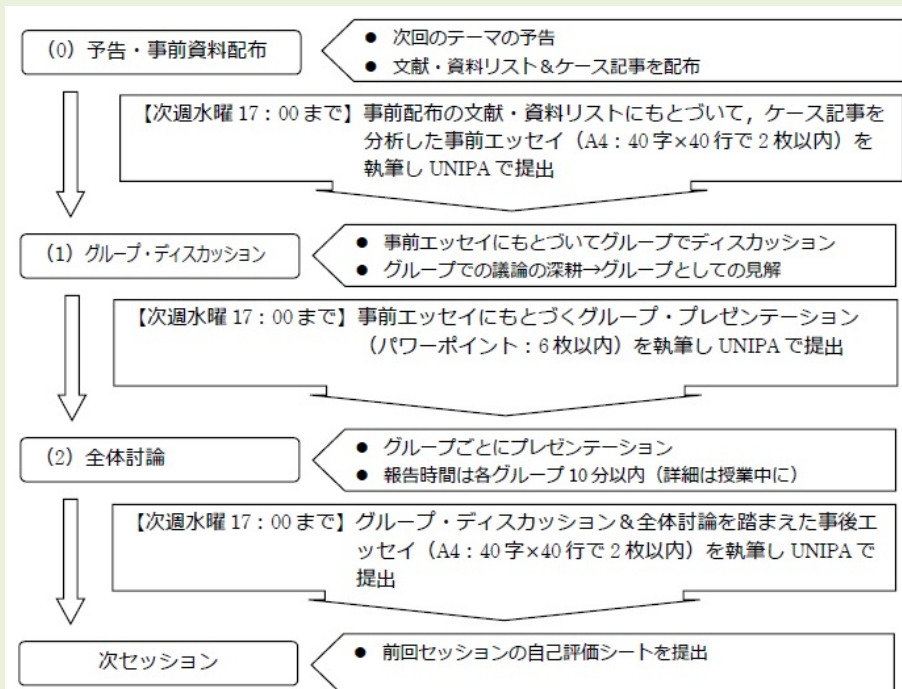
●関連科目●データの探索、分析、報告、あるいは、討論、エッセイの提出など

特定の回の授業の流れ

【特殊講義 I】



【特殊講義 M】



●関連科目●データの探索、分析、報告、あるいは、討論、エッセイの提出など

評価方法

【特殊講義 I】
プレゼンテーションおよび提出レポート (×3) 60%
質疑・相互評価 (×3) 40%

【特殊講義 M】
事前エッセイ (小論文) 25%
グループ・ディスカッションへの参加・貢献 20%
全体ディスカッションへの参加・貢献 20%
事後エッセイ (小論文) 25%
自己到達度評価 10%

学習成果

学生からの感想などからみても、文章執筆能力や論理構成能力の向上につながったといえる。特に、特殊講義 M はかなり高密度に文章執筆と討論を繰り返すため、受講生への負荷も大きい。能力向上には寄与している。特殊講義 I は 2 年生の後期から受講可能であるため、3 年生との合同グループによる「教え合い」効果もみられる。また、専門科目の内容を実際に分析することで、理解が深まるという効果もある。

担当教員のこの授業に対する
思い

学生にとっては、決して楽な授業ではない。しかし、真剣に取り組めば、確実に論理構成能力や文章執筆能力、討論能力など、社会人として活躍するうえで基礎となる能力を身につけることができるという点で意義は大きいと考えている。

その一方で、担当教員にとっても負荷は大きい。特に、提出物の添削とリフレクションが重要な意味を持つと考えるが、他の授業や学務との兼ね合いから必ずしも十分に行き届いていないという反省もある。教員の負担と併せて考えないと、十全な効果を生み出しえない。

とはいえ、こういった授業が受講生からも好評を得ていることを考えれば、さらなる展開や他の科目との連携などカリキュラムにおける位置づけを練り上げる必要がある。

授業風景



●関連科目●データの探索、分析、報告、あるいは、討論、エッセイの提出など



教育情報処理論 I

四国大学

生活科学部児童学科

奥村 英樹

受講生数	15名
科目の位置づけ	児童学科は、教育・保育の現状を理解し、これに関する課題を発見・解決する力や、専門知識と技術を身につけ、実践的に指導する力の修得を目的としている。本科目は、小学校の授業に必要な ICT 機器の活用について、その知識や技術、活用に関する課題を発見し解決する力の育成を担っていると考えられる。
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none">・電子黒板を活用した授業例を説明できる・電子黒板を活用した指導案を作成し、授業ができる・タブレット PC を活用した授業例を説明できる・タブレット PC を活用した指導案を作成し、授業ができる・情報モラルの種類について説明できる・情報モラルの指導を意図した指導案を作成し、授業ができる・子ども向けのソフトを体験し、留意点について理解する・プレゼンソフトを利用した教材作成の手法を理解する
教授法とその特徴	<p>学校教育で注目されている ICT 機器の活用や、情報モラルについて、2～5 回ごとにテーマを変えて学ぶ。用意しているテーマは次の通り。</p> <ul style="list-style-type: none">・電子黒板の利用・タブレット PC の利用・情報モラルの指導・パワーポイントによる教材開発 <p>最初に、実物の操作も交えながら先行事例を一通り教員より説明する。次に、具体的な課題を学生に与えて、4 名程度のグループごとに、配布した資料やネットワーク上の検索結果を元に検討させる。検討に際しては、KJ 法やワークシート等を利用してまとめさせている。まとめた結果は、グループ単位でクラス全体に対して発表させるほか、グループごとに説明役を 1 人決めて同時並行的に少人数の説明会を開かせ、質疑応答がしやすいようにしている。</p> <p>KJ 法を利用してまとめる回では、大き目の付箋紙とカラーのマジック、模造紙を用紙している。また、学校現場で利用している ICT 機器の例として電子黒板やタブレット PC、典型的なアプリなども準備している。</p>
特定の回の授業の流れ	<p>第 5 回 電子黒板の教育利用の考察</p> <p>学生達は、この授業までに、電子黒板を利用した授業例を学ぶほか、実際に電子教科書を操作や、5 分程度の模擬授業用の指導案の作成などを経験している。</p> <p>グループ分けした後に、付箋紙とカラーマジック、模造紙を配布する。</p> <p>KJ 法を理解していない学生もいる事を想定し、この回のみ順次指示を行う。</p>

●専門科目●KJ 法やワークシート等を利用したグループワーク、発表

	<p>(1)電子黒板の活用例のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none">・電子黒板の活用例を、付箋紙1枚(同じ色)に1つずつ、書き出させる・模造紙の上で、似た活用例を近くに集めてグループ分けさせる・グループごとにタイトルと補足コメントを書かせる <p>(2)電子黒板の実践上の留意点のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none">・グループ分けした活用例を参考に、実践上の留意点を付箋紙1枚(先と異なる色)に1つずつ書き出させる・留意点を、同じ模造紙の中に配置させ、同様にグループ分けさせる。・グループ分けした留意点についても、タイトルと補足コメントを書かせる。 <p>(3)発表の準備</p> <ul style="list-style-type: none">・次回にグループごとに発表する予告を行い、誰が発表しても伝わるよう、説明の段取りや特に強調したい点について、検討させる。
<p>評価方法</p>	<p>授業で扱ったテーマについてレポートを課し、その質によって評価する。 主な評価の観点は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none">・活用や授業方法を、網羅的にとらえられているか・具体的な授業イメージが挙げられているか・利点や留意点について、具体性と妥当性があるか
<p>学習成果</p>	<p>統計的な分析は行っていないが、教員からの説明が主要な回以外は、学生同士で意見を積極的に出し合ってまとめたり、グループごとに説明役を決めて同時並行的に説明させた際には、学生間で質疑応答が活発に行われたりしており、想定したテーマごとに地に足の着いた学習ができていたと考えられる。期末のレポートについても概ね満足できる質であった。</p>
<p>担当教員のこの授業に対する思い</p>	<p>特に ICT の教育利用などは、5～10 年たてば技術的には古くなる。また、学習指導要領などの教育内容も、今後ますます変化のサイクルが短くなっていくと考えられる。従って、「現時点での最先端の授業方法を理解する」のではなく、「新しい技術を教育に利用する際の留意点と考え方」を、学生自らが編み出していけるようになる授業を目指している。</p>
<p>授業風景</p>	

専門ゼミナール

静岡産業大学

経営学部 経営学科

熊王康宏

受講生数	13名
科目の位置づけ	<p>基礎教養科目で習得した内容を踏まえて、社会、特に、経営学部における専門分野についてより知識を深めて、産業界における課題を解決し貢献しえる人材の能力開発を進める授業です。</p> <p>本学のDPにおける「実学に基づく教育」の一環として、特に、実践力注目し、社会で活躍するために不可欠となる専門知識や技能を身につけます。自立して社会に貢献する意欲を身につけるため、産官より依頼のあった研究を共同で実施するものです。人間力形成を養うことが最も重要であると考えております。</p>
科目の到達目標	<p>先行研究に基づき、事例研究を踏まえ、産業界の課題解決法を主に「感性評価」、「マーケティング」により達成することです。1年間の中で、実地調査、依頼先との会議にも参加し、研究期間内への報告も含めたプレゼンテーションを到達目標としています。経営における感性評価の役割を、主なテーマとして取り組んでおりますが、商品開発における原価計算等についても教示しております。</p>
教授法とその特徴	<p>学生には、月間行動予定表を提出してもらい、1か月間の報告書（企業における月報）を提出してもらいます。この報告書は、企業でのそれと同じように実際に声に出して学生全員の前で報告してもらいます。主には、授業、研究の方向性などに関して、進捗状況を報告してもらいます。</p> <p>学生には、先行研究を調査してもらい、机上の調査だけではなく、実際の研究対象について実地調査するなど“体験型学習”を重要視し、また、購買評価などの最終判断的な基準を感性評価により明らかにしています。そのため、パソコン演習室等（2205教室）で、一人一人が統計処理できるように、目的、評価方法、分析方法について、学生が納得できるまで教示しています。統計処理では、主に、エクセル等の一般的なソフトウェアで解析しています。</p> <p>本授業では、プロジェクト制として、学生を幾つかの研究グループに分け、興味のあるテーマについて主担当を決めています。勿論、研究に対しては、全員で取り組みますが、主担当がスケジュール等を決めて進めています。次回の授業までに調査した内容、これからの予定なども、授業時間内で報告してもらいます。</p> <p>e-learningとして、チエル株式会社 CHieru CaLabo LX v3.1の教育システムを利用し、学生の画面操作などをモニタリングしながら進み具合、理解度合いを管理し、授業を進行しています。学生が発表する際にも、同システムを活用し、プレゼンテーション能力を向上させています。</p>

●専門科目●先行・事例研究、感性評価、マーケティングにより産業界の課題を解決する

<p>特定の回の授業の流れ</p>	<p>共通する経営学に関する基本的な事柄（コンプライアンス、企業の社会的責任など）をゼミナールの初回で取り扱い、その後、感性・官能評価における評価方法（評定尺度法、面接法）、分析方法（2SD、標準偏差、分散など）を各回で教示します。</p> <p>感性評価により得られた結果をエクセルシートにて集計する。この際、アンケート調査用紙を各学生に分担し入力します。</p> <p>その後、“エクセルアドイン分析ツール”をインストールし、“データ分析”の“基本統計量”により、平均値、標準偏差、分散、95%信頼区間等を算出し、プロフィール分析します。感性評価だけではなく、経営学等においても有効な算出方法であることも教示しています。</p>
<p>評価方法</p>	<p>出席回数、授業内での報告書の提出回数、研究の取り組み、報告会での報告内容などを勘案し、評価します。結果だけではなく、途中の過程も十分考慮し、評価するようにしています。</p>
<p>学習成果</p>	<p>・地域ブランドを創出するメロンの食べごろ保証技術の開発 —風味・食感を含めたおいしさ評価技術の開発—</p> <p>地域ブランド化されているメロンの“おいしさ”を分析するために、これまでは物理化学的特性値を主軸に研究されてきましたが、人の感性で評価した結果を分析し、食べごろとの関係性を明らかにしました。また、脳波計により脳波の情報を解析し、メロンのおいしさを評価する手法を確立し、購買行動との関係性を明らかにしました。</p> <p>この研究は、農林水産省・食品産業科学技術研究推進事業発展融合ステージにより進められました。</p> <p>・静岡県「新成長戦略研究」切り花の新商品開発による静岡ブランドの強化</p> <p>静岡県農林技術研究所及び県内3つの生花市場と連携し、切り花のブランド力向上と消費拡大を目指し「メンテナンスフリーの切り花商品」を開発しました。バラとガーベラのコンセプト品が、浜名湖花博 2014 浜名湖ガーデンパーク会場で展示し、本研究室でモニター調査しました。新開発の日持ち剤入りゼリーを入れた容器に挿した切り花で、手入れがらず1週間以上花を楽しむ新商品となりました。</p> <p>・地域ブランド創出のためのブランディング研究（産官学共同研究による福田織物産業活性化に向けて）</p> <p>磐田市福田では、別珍・コードデュロイを全国の約90%以上の割合で生産されており、この別珍・コードデュロイの、地場産地の特性を科学的に調査分析し、新たなブランドを創出することによって地域の活性化を図ろうと取り組んでいます。コードデュロイは、畝の幅が生地により異なるので、触り心地を脳波計により解析し、癒しの効果が見られるかどうかを実験し、経営学に反映させています。</p> <p>・袋井市の地域ブランディングに関する研究</p> <p>全国花火名人選抜競技大会『ふくろい遠州の花火』は、全国でも花火の打ち上げ数が上位にランクインされており、感動する花火大会として静岡県内外でも有名な行事となっています。この大会に学生が協力し、来場者を対象に</p>

●専門科目●先行・事例研究、感性評価、マーケティングにより産業界の課題を解決する

花火大会のブランド化と経済波及効果に関するアンケート調査を実施しています。

・富士山いただき弁当の開発、販売へ

本学と静岡県立富岳館高等学校との高大連携によるお弁当づくりに取り組みました。この高大連携には、株式会社富陽軒にも参加いただき、共同開発として、富士山世界文化遺産登録を記念した「富士山いただき弁当」を、JR東海道新幹線 新富士駅上下線の売店で期間限定販売しました。

この取り組みにより生まれた弁当は、富士山世界文化遺産登録を記念して日本人の“おもてなし”のコンセプトをもとに、三者間での共同開発によりデザインされました。

・遠州の小京都 森町 “まちづくり” に関する研究

静岡県西部に位置する森町は、「遠州の小京都」と呼ばれています。平成の世になり、新たに森町のまちづくりを進めるべく、遠州の小京都まちづくり推進会議に参加し、「見て歩きコース」を提案し、小京都と呼ばれるに相応しいまちづくりと商品開発に取り組んでいます。

実学に基づく教育の中で、座学のみならず学外へ教育のフィールドを広げ、企業経営を重視した商品開発に取り組んでいます。卒業後、大学で学んだ知識と経験を活かし、即戦力で「ものづくり」を支えることのできる“人財”となれるよう、感性評価・マーケティングにおける実験計画から、分析までを一人でできるようになっています。

自らの出身大学が金沢工業大学であり、故 田川高司先生、博士号主査神宮英夫先生に師事してきました。また、石川憲一学長先生には、長年、教育方法について薫陶を受けておりました。学生のために大学（教員）ができることを常々考えており、企業経験からも、現在のような教育方法を確立してまいりました。

学生力×表現力×発想力×展開力=人間力として考えており、学生力は基礎教養科目における学力を、表現力はプレゼンテーション能力を、発想力、展開力は、感性評価によりそれぞれデザインできると考え、これらを形成することにより社会における人間力を発揮できると考えております。

社会人として、即戦力となれる人材を育成するために、実学に基づく教育内容を充実できるように心掛けています。これまでの経験を活かし、担当する授業でも、企業経営に関係する多くの事を取り入れながら、ビジネスにおいて大切な要素をきめ細やかに伝えています。企業でも重要である「報・連・相」を、常にできるような仕組みを授業にも取り入れています。

企業での即戦力となれる人材となれるための論理展開できる能力と、自らが課題に対して達成できる問題解決能力を身に付けることができます。これは、企業における総合的な「人間力」を養うことに繋がります。

大学教育と人間性を本学で学ぶことで、地域社会の一員であることの自覚と責任を認識し、自らが行動できるような人材となれるように教育に取り組んでいます。

担当教員のこの授業に対する思い

●専門科目●先行・事例研究、感性評価、マーケティングにより産業界の課題を解決する

授業風景



この事例に関する報告書、ウェブサイト等

ふくろい遠州の花火 2013 への協力活動

http://www.ssu.ac.jp/news/news_detail2841.html

12/1 より期間限定発売☆富士山いただき弁当（本学含む三者間での共同開発）

http://www.ssu.ac.jp/information/information_detail3054.html

その他の特記事項

学生には、学外活動として、各種フェアにも参加してもらい、プレゼンテーション能力を高める機会を与えています。（中学生のための「いわたサイエンスフェア」に出展

http://www.ssu.ac.jp/news/news_detail4203.html）（学生による浜松ビジネスマッチングフェアでの研究紹介 http://www.ssu.ac.jp/news/news_detail3488.html）

プレゼンテーション技法

十文字学園女子大学

人間生活学部メディアコミュニケーション学科

安達 一寿

受講生数	30名
科目の位置づけ	<p>本科目は、メディアコミュニケーション学科の基礎専門科目としての位置づけであり、1年次前期必修科目として、学生全員が履修する。</p> <p>他の専門科目の多くで、プレゼンテーションやグループ活動の機会を多く設けていることから、その基礎となる技術や方法を身につけることを主眼とし、様々な学修活動場面での応用や展開が可能な内容としている。またこの授業は、アクティブラーニングによる参加型授業ですすめることを前提としている。</p> <p>学科のディプロマポリシーには、「社会人に求められる汎用的な知識・技術である、情報を正しく読み解く力、市民社会の一員として豊かな人間関係を築くためのコミュニケーション能力、問題解決能力を身につける」とあり、このポリシーに対応したものである。</p>
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none">・プレゼンテーションの基本的な考え方や技能を理解する。・パワーポイントの実践的な活用スキルを身につける。・グループ、及び個人でテーマに沿った課題解決やプレゼンテーションの準備ができる。・グループ、及び個人で実際に効果的なプレゼンテーションを行うことができる。・適切な評価観点を持って、自己評価・他者評価を行うことができる。
教授法とその特徴	<p>第1回目～第5回目 「理論と技法の基礎を学ぶ」</p> <ul style="list-style-type: none">・プレゼンテーションの基礎理論（講義中心） 基本概念、マインドを高める、設計、極意、評価の項目に関しての講義を行う。 講義の効果を高めるため、授業中での教え合い活動や、授業後のまとめやふり返りのコメント記入を実施している。コメントの記入は、e-learning システムを用い、個々のコメントを共有している。・プレゼンテーションソフトの基礎技法（演習中心） 演習用テキストを用い、パワーポイントの技法やデザインの方法について、課題を実施する。 課題の提出は、e-learning システムのレポート機能で実施している。 <p>第6回目～第9回目 「グループプレゼンテーション」</p> <p>「女性たちが、自分らしく、輝いて、仕事に取り組んでいける解決策」（「なでしこ学生サミット（H24）課題 内閣府男女共同参画局）を題材に、そこでの課題について提案・発表する取組である。4名程度のグループで役割を分担し、情報収集・整理と議論・検討を行いながら課題解決にあたる。発表時の様子は、講義収録システムで録画をし、発表後の自己評価に活用する。また聴衆は、クリッカーを用いてリアルタイムで「よい／わるい／気になる」の評価を行う。また、発表後にはプレゼン評価シートに得点やコメントを記入・お互いに交換し、録画面像のふり返りと共にグループでの他者評価を実施している。</p>

●専門科目●プレゼンテーションの基礎理論と技法を学び、グループプレゼンテーションを行う

第 10 回目～第 15 回目 「地域を学ぶ 調査・発表」

大学で独自開発した地域学修テキスト「いいね！にいざ」（埼玉県新座市 大学所在地）で、地域に関する課題や地域学修の視点を学修した後、新座市か自分の居住している地域に関する情報収集・調査活動を行い、その結果を各個人でまとめプレゼンテーションを行う。評価の方法は、グループプレゼンテーションと同様である。個人毎の発表で人数が多くなることから、他の授業（情報処理演習Ⅰ・入門ゼミナール）との連携しながら発表の時間を確保しながら進めている。

特定の回の授業の流れ

「地域を学ぶ 調査・発表」初回

- ・課題の趣旨説明・最初のグルーピング
ジグソー法を応用した討論活動を実施する。そのための、基本のグループを構成する。
- ・テキストの内容確認
テキストにある 10 個のキークエスチョン（歴史、現在、未来、自然等の分野）から、グループ内で調整し、各自異なった興味・関心のあるキークエスチョンを選ぶ。
- ・グルーピングと調査・討議
同じキークエスチョンを選んだ学生同士でエキスパートグループを構成し、そのキークエスチョンに関する情報を調べ、エキスパートグループ毎に調査と討議を行う。学生には、一人一台のノートパソコンがあり、主に Web の情報や新聞記事の学内データベースを活用する。
- ・各グループ毎のフィードバック
基本のグループに戻り、それぞれの調査や討議の結果を基本のグループメンバーにフィードバックする。
- ・各自での課題の明確化
次時以降に各自で取り組む課題内容や調査項目について、明確化を図り、調査活動の計画を立てる。

評価方法

- ・プレゼンテーションの基礎理論(満点 20 点)
コメント内容により、基礎知識が理解で来ているかを評価
 - ・プレゼンテーションソフトの基礎技法(満点 20 点)
演習課題の完成度、提出状況で評価
 - ・グループプレゼンテーション(満点 30 点)
自己評価、他者評価の状況より評価
 - ・地域を学ぶ 調査・発表(満点 320 点)
自己評価、他者評価の状況より評価
- 以上の 4 項目をそれぞれ得点化し、合算して最終評価としている。

学習成果

- 学生の感想より、特徴的な内容は以下の通りである。
- ・プレゼンとはなにか、相手の心をつかむにはどういった技を使うべきなのか、相手に見やすい資料作りなどを学ぶことが出来た。
 - ・発表時の行動や態度は先生からだけでなく、クラスメイトからも多く学ぶことが出来た。
 - ・みんなからのコメントからだけでなく、実際自分がみんなの発表を見ていて気づくことがあった。
 - ・今まで自分達で内容を練って意見をまとめ、分かりやすく伝えるということを意識したことがなかったので、この授業でやってきたことはとても良い経験になった。

●専門科目●プレゼンテーションの基礎理論と技法を学び、グループプレゼンテーションを行う

・実際みんなの前でプレゼンしたことで反省すべき点も多々見つかりました。

プレゼンテーションの基礎理論と技法を学修し、その後、グループ／個人と実際の発表の機会を設けたことで、実践を通じた学びができたと考えている。また、発表における自己評価／他者評価を通して、様々な観点での振り返りが可能になったと考えている。

担当教員のこの授業に対する思い

「プレゼンテーション＝発表」と捉えられがちであるが、より聴衆の心に残るプレゼンテーションを行うことを目標に据えながら、そのための準備や計画の重要性、リハーサルの実施、発表後の評価というサイクル（PDCA）を意識して授業計画を立てている。また、実際に人前でプレゼンをするという行為を通して、気恥ずかしさを乗り越え、自信がもてる発表や主張ができることを願っている。プレゼンテーションの技術や態度は、大学のみならず社会人になっても必要とされているものであるため、機会を捉えて研鑽に努めて欲しいと考えている。

授業風景



個人での発表の様子（2015年度）



講義収録システムでの記録（2015年度）



グループ活動の様子（2014年度）

●専門科目●プレゼンテーションの基礎理論と技法を学び、グループプレゼンテーションを行う

その他の特記事項

本授業の内容の一部は、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC）の地域志向科目として実施している。

政策過程論

淑徳大学

コミュニティ政策学部／コミュニティ政策学科

矢尾板俊平

受講生数	約 80 名
科目の位置づけ	政策学分野の「基幹科目」に位置付けられ、「基本科目」(必修科目)の単位取得後、次の段階の学ぶ科目となっている。
科目の到達目標	①政策プロセスにおける基礎的な知識、理論を修得すること ②現代の政治経済問題について、課題を発見し、課題を設定し、具体的な解決方法を政策プロセスの視点から提案することができること。
教授法とその特徴	<p>学外のパートナーと連携し、教室内での学びと教室外でのサービスラーニングを組み合わせ、学生にとって、現実的な問題について理論的フレームワークを通じて検証、分析を行い、具体的に現実的な問題に関与しながら、課題解決に取り組む、新たな「気づき」を得ていく。</p> <p>そのための具体的な方法としては、『ワークショップ方式』を活用している。『ワークショップ形式』は、「思考」や「省察」を経て「知識」と「経験」に統合による新たな知識創造プロセスを生み出す教授法である。知識をインプットする機会、経験の機会、省察の機会を設けたとしても、そこに知識と経験の統合が促進されるプロセス(知識創造のプロセス)を考える必要がある。そこで知識と経験を「思考」というプロセスという『ブリッジ』を『ワークショップ形式』は提供するのである。私の『ワークショップ形式』では、①「知識・情報を知る」、②「話し合う」、③「気づく」、④「表現する」というサイクルを学びのプロセスとしていくことが特徴である。</p> <p>また、こうした『ワークショップ形式』を実施する際には、「多様性」と「エフォート・コミュニケーション」が重要なカギとなる。つまり、学生にとって「エフォートレス」なコミュニケーションは、社会人基礎力やコンピテンシーを高める機会を提供しない。そこで、学外のパートナーなど多様な存在が、学びのプロセスに関与し、学生にとって「ハイ・インパクト」な環境を創り出す必要がある。そこで、学外の関係者を授業に参加してもらうような工夫も行っている。</p> <p>15 回の授業を通じた授業デザインを行い、その中で学生の問題関心を掻き立て、学びの意欲を高める工夫や深い学びに誘う工夫を行っている。</p>
特定の回の授業の流れ	<p>2015 年 4 月の統一地方選挙前には、投票行動、選挙について学ぶための授業を行った。具体的には、千葉市選挙管理委員会に協力を得て、実際の「投票箱」、「投票用紙」を活用して、「模擬投票」を実施し、その上で、「ワークショップ形式」で学びを深める工夫を行った。</p> <p>授業前には、学生たちが統一地方選挙の立候補予定者を集め、公開討論会を実施した。その内容を動画で保存し、インターネットで視聴できるようにした。これが授業の事前学習教材となる。当該回の教材は、学生自らが教材を作成することになった。そして事前学</p>

●講義形式●学外のパートナーと連携したワークショップなど

	<p>習として、このビデオ動画を確認した。</p> <p>当該回の授業は、千葉市選挙管理委員会の協力を得て実施された。授業の冒頭に、千葉市選挙管理委員会から、選挙制度等に関する説明があり、選挙制度について学ぶとともに、実際に配布されている「選挙公報」を学生が読み、学生同士でディスカッションを行った。</p> <p>また教員から民主主義に関する理論について解説を行った。</p> <p>その後、実際の素材を使った「模擬投票用紙」、実際の「投票箱」、「記載台」、「投票用紙発券機」を利用し、模擬投票を行った。投票後は、実際の計数機を活用し、開票を行った。</p> <p>開票結果を踏まえ、教員から投票率が低下した場合の課題等の解説を行うとともに、議論の材料を提供した。ここまでの①「知識・情報を知る」のプロセスとなった。</p> <p>そして、「投票率を向上させるためのアイデア」について、学生同士のディスカッションを通じて、②「話し合う」、③「気づく」のプロセスを通じて、投票行動や選挙制度、民主主義について考え、学んだ。そして、ディスカッションの内容を④「表現」し、学生同士のディスカッション内容を教室全体で共有し、授業内容をまとめた。</p> <p>事後学習として、模擬投票の感想やディスカッション内容を整理し、レポートにまとめることで「省察」を行う内容とした。</p>
<p>評価方法</p>	<p>本授業の評価方法は、基本的には、論述試験による到達度の確認を行っている。授業で学んだ知識、理論に基づき、現実の問題を捉え、課題を発見し、発見された課題の解決方法を検討できているかどうかを確認する。また必要に応じて、「ルーブリック」も活用し、学生が獲得したコンピテンシーの習熟度も把握する。</p>
<p>学習成果</p>	<p>本授業の学習成果として、政治、政策過程に関わる基本的な知識や理論を修得することができた。またこうした知識や理論も、知識や理論として修得するだけでなく、「模擬投票」などの体験型学習、『ワークショップ形式』を活用した知識創造のプロセスを通じて、学生のコンピテンシーを高めるとともに、課題発見力、課題設定力などの「活きた」知識やスキルを修得することができた。</p>
<p>担当教員のこの授業に対する思い</p>	<p>担当教員は、いかに学生の授業や学ぶべき学習内容に興味・関心を持たせ、さらに主体的な学習者として、いかに深い学びにつなげるか、ということ意識しながら授業の教授法を検討している。そして、授業で得た学術的な知識、理論を実社会の中で、課題を発見し、課題を設定していくための「実学的な知識」として修得させるか、という点に重点を置き、工夫を行っている。</p> <p>そのためには、学生にとって「ハイ・インパクト」な経験、体験を提供し、自らの学問的な関心を涵養するような工夫を行う必要があると考えている。そうした問題意識や関心が高い学生が困難なレベルの学習でも自発的に挑戦し、学びを深めるためのエフォートを努力することが経験上、確認されている。</p>

●講義形式●学外のパートナーと連携したワークショップなど

授業風景



この事例に関する報告書、ウェブサイト等（ない場合は省略可）

4月9日（木）のNHK「おはよう日本」内で紹介されるとともに、同日の千葉日報で記事が掲載される。

事前学習教材：「公開討論会の内容」

<http://www.soc.shukutoku.ac.jp/shumpei/chibademo2015top.html>

その他の特記事項

本授業に関連して、淑徳大学コミュニティ政策学部矢尾板俊平研究室は千葉県選挙管理委員会と連携し、2014年度から主に若年層の投票率を向上させるための活動として、「ちばでもワークショップ」、大学生が候補者役となつての小学校での模擬投票に取り組んでいる。本年度は、選挙権が18歳以上に引き下がったことにより、高校での模擬投票に取り組む予定である。また2014年の衆議院総選挙、2015年の統一地方選挙においては、立候補予定者へのインタビューを実施し、動画インタビューページの制作、選挙戦のフィールドワーク等も行っている。

「ちばでもワークショップ」には、今回、取り上げた授業の履修者も「政策学概論」（1年次後期）の受講者として参加しており、1年次後期、2年次前期という垂直的な科目間連携となり、ラーニングコミュニティを形成しながら、ある程度、共通のテーマを持ちながら学ぶことができる工夫をしている。

創造デザインコンペ (前期)

創造デザイン研究 (後期)

湘南工科大学

工学部 総合デザイン学科

佐藤 博之、高野 修治、木村 広幸、赤木 良子

受講生数

約 40 名 (以下の紹介内容は 2 グループの一つ、約 20 名が受講)

科目の位置づけ

総合デザイン学科のカリキュラムは、大きく「デザイン系、工学系」の 2 種類に分かれ、4 年次までに必要な知識と技術を修得するカリキュラムツリーによって構成され、その中の「デザイン×工学」系のコア実習 8 科目の基本構成を下表に示す。

1 年次の実習では、モノづくりに最低限必要な立体造形を表現できる基礎能力を養う。一方で、工作機械を活用した体験実習から製法の基本も修得する。2 年次では、デザイン系 CAD を用いて自由な形状表現スキルを修得し、機能を有する装置のモデリングと制作に取り組む。

本科目は 3 年次科目であり、学科のカリキュラムの中でも実習の柱と位置付ける「創造デザイン実習 (前期：創造デザインコンペ、後期：創造デザイン研究)」の 2 科目を 1 年間通して実施される。1、2 年次に学んだ「デザインと工学」の知識と技術を「企画・デザイン、設計、試作・評価」のプロセスを通じてリアリティのあるモノづくり教育を実践する実習科目である。下図の「応用デザイン」のカテゴリーに属している。

表「デザイン×工学」系のコア実習科目

3年次	創造デザイン研究
	創造デザインコンペ
2年次	デザイン応用実習
	機能モデル製作実習2 機能モデル製作実習1
1年次	モデリングイラスト実習
	スケッチ・図面・モデリング実習
	モノづくり実習



図「創造デザイン実習」の位置付け

科目の到達目標

- 1) 研究の必要性、動機を明確にできる
- 2) 研究計画を立案できる
- 3) 従来の研究を調査し、問題点を明確にできる
- 4) 問題点を解決するアイデアを出すことができる
- 5) 自分で考えて研究を推進することができる
- 6) 研究成果を評価することができる
- 7) 研究成果を論文にまとめ、発表することができる

教授法とその特徴

本授業は、1、2 年次に学んだ「デザイン×工学」の知識と技術を活用し、構想からその実現までのプロセスを通じてリアリティのあるモノづくり教育の実践を目指すことが目的である。この目的を達成するために、当学科の全教員が 3 年次生と一丸となって活動し、その中でも学生主導で構想からその実現までにプロセスを展開することで、モノづくりの楽しさを学生自身が得るように指導する。

「創造デザイン実習」は、前述のカリキュラムの科目構成で学んだことを総合的に実践できる科目として位置付けている。12~14 年度の 3 年間は、二つのテーマを設定した。一つ目は「水上の乗り物」、二つ目は「ダンシングロボット」であり、学生は何れかを選択して実習に取り組む。このテーマ設定の背景は、地域のニーズを取り入れていることが特徴の一つである。「水上の乗り物」は、近隣の県立辻堂海浜公園内の人工池の閑散期における有効利用、および「ダンシングロボット」は盆踊りの文化伝承などである。

受講生約 40 名を 2 つのグループに分け、学科専任教員 (8 名) をデザイン系と工学系の 4 名で構成する 2 チームとし、2 つのテーマをそれぞれ分担しコーチャングする。どちらのテーマにおいても、前期の「創造デザインコンペ」における目標は、コンペを実施して優れた企画・アイデアを決定することであり、後期における「創造

●必修科目●デザイン思考等を導入したPBL型授業

デザイン研究」の目標は、コンペで選出された企画・アイデアをフルスケールでの実機を試作し、その評価を行うことである。

本研究では、「水上の乗り物」に取り組んだグループ教員による取り組み結果を主に述べる。

主たる教授法とその特徴は以下の通り。

◆PBL型授業での展開：高次のアクティブラーニング

調査・企画・デザイン・設計・機構設計・CAD設計のモノづくりプロセスを体験する。また、ステージ毎の

ポイントにおいて、進捗を含めたプレゼンを実施し、資料作りやプレゼンの良し悪しについてピアレビューすることで気づきにつなげる。さらに、「水上の乗り物」は、近隣の県立辻堂海浜公園内の人工池を利用するため、カヌー実機や旧型の水上の乗り物に乗って体験調査を実施するなど、「人間中心のデザイン」@デザイン思考の神髄を展開する。

◆デザイン思考の導入

デザイン思考のアプローチ「考えて⇒作ってみて⇒評価して⇒課題抽出して⇒また考える）」を用いて、通年で2サイクル「半期1回」回すことによって、モノづくりプロセスを実体験する。

◆チーム・コーチングの試み

教員は分担・分業を止め、複数教員が同じ授業に同時に入って、学生をファシリテートする意識でコーチングに徹する。また、実習後には定期的な教員MTGを実施して、方向性を確認する工夫を行う。

◆発想法の強化

コンセプトメイキングやその後のアイデアを明確にするために、BS法、KJ法、Mメソッドなどの発想法を導入。これらは、他科目と連携している。

◆ワークシート（紙ベースの記述）によるPDCAサイクルの自己チェック

実習始めには、毎回の目標立て・進行項目と手順を考え、作業終了時には、振り返りとして結果・成果、達成度の自己点検と、次への課題に関する気づきなどをまとめる。

◆2014年度 後期 創造デザイン研究 第3回実習_10月14日進行の例

全体目標：実験に関するイメージを明確にし、4限目中にはサザン池実験準備に関する作業に取掛る。

【3限目】

1. チーム内ルールの決定 (10分)

- ①サイボウズ確認 (出てきた案, 議論の整理)
- ②3つに絞るディスカッション (分類, 統合・整理, 総意) →今日から「意識」!

2. キャラクターと役割 (10分)

- ①グループ用ワークシートの作成

3. チーム内コンセプトの決定 (15~20分程度)

- ①共通グランドルールの説明 (2分)
 - 1) Yes And, 2) 5秒以上の沈黙時間を作らない, 3) 書く (メモする) ことを意識する
- ②前期プログラムの確認 (5分) →主に前期リーダーから説明
- ③「Keep (継続したいこと), Problem (課題, 問題), Try (挑戦)」の分類 (5分)
- ④5W1Hの議論 (確認と修正) (5分)
- ⑤決定事項の確認 (3分)

4. サザン池実験計画の決定 (45分)

- ①実験計画ディスカッション
 - 明確な目標設定, 仮説と実施内容の絞り込み(2~3案), 方法 (15分)
- ②デザインレビュー用シートの作成・確認 (5分)
- ③第1回デザインレビュー発表 (全体, グループ毎)
 - 説明3分, 審議5分/グループ (全体で15分)
- ④指摘箇所の修正・加筆に関する議論 (5分)
- ⑤第2回デザインレビュー (個別, グループ毎) (5分)

【4限目】

5. 簡易評価実験の準備 (60分)

- ①実験準備のための役割分担 (10分)
- ②素材集め+検討 (50分)

6. 振り返り (20分)

- ①学修ポートフォリオ (10分)
- ②プロジェクトマネージャによる本日の成果確認+次回課題 (10分)

宿題：サザン池でのアンケート調査項目案

特定の回の授業の流れ

評価方法

右表はシラバスより抜粋した、評価方法の一覧である。実習であるので「成果物・発表」の比重を高くして、授業中の取り組む様子についても加味する。同じ実習に複数教員が入っているため、学生には十分目を配ることが出来る状況となっている。

評価対象項目としては、普段の実習への取り組み姿勢やチーム貢献度、毎回のワークシート（学修ポートフォリオ）記述内容、プレゼン発表、最終レポート内容を加味して、さらに全ての教員が各学生の評価に対する意見交換を実施（成績評価の会議）して、最終評価としている。

指標と評価割合		評価方法					
		受講態度	授業中の課題	予習・復習	成果物・発表	試験	ポートフォリオ
共通指標	受け取る力	○		○			
	深める力		○				
	連める力			○	○		
	高める力		○	○	○		
	伝える力			○	○		
固有指標	知識・理解	○			○		
	技術・活用		○		○		
評価割合		30	10	10	50	0	0

2012年度の成果

テーマ：変身するカヌー

右写真は、完成した実機と試乗実験の様子。誰もが乗艇できる「ユニバーサル・カヌー」をコンセプトとして、スタビライザーと推進モーターを備えたカヌーを開発することができた。



2013年度の成果

テーマ：走る水上浮遊体

右写真は、完成した実機と試乗実験の様子。右写真は、実機完成後の試乗実験の様子。2人乗り+スタビライザーのスタイリッシュ化を達成することができた。



2014年度の成果（2モデル）

① アクア×わくわく×仲良しファミリー



② アクア×わくわく×Carry Smile Box



右写真は、完成した実機と試乗実験の様子。2チームによる競争を実施することができた。それぞれ「ファミリー」や「笑顔」といったコンセプトを実現する艇を実現することができた。

学習成果

◆2014年度の学生による成果発表会ほか

後学期授業の最終回において、外部審査員（役所職員や地区の民生委員他）を複数お招きして、ポスター形式による成果発表会を実施した。この発表会は、別テーマを担当・履修していた教員・学生らも参加する、学科を挙げてのイベントと位置付けている。ほぼ全員が何らかの発表を行い、時には厳しい質問への回答に悪戦苦闘しながら、学生らは自らの取り組みについて自信を持って発表していたのが印象的であった。

最終レポート課題（記述式）においても、ほとんどの学生は本実習を好意的に捉えており、デザイン思考をベースとしたモノづくり教育の目標達成は9割以上という（教員間での）自己評価に至っている。この実習で頑張った学生の就職内定率（今年）は非常に高い。



図 最優秀作品に選ばれたチームのポスター制作の例

●必修科目●デザイン思考等を導入したPBL型授業

担当教員のこの授業に対する思い

- 1) アクティブラーナーになり、自ら毎回の課題を発見し推進できる力を身に付けること。
- 2) 当日の目標に対する成果を毎回自己チェックできるようになる。PDCAを自分で回せるようになること。
- 3) 課題を推進するにあたり、自分に不足している、または必要な学力(知識・技術)を身に付けていくこと。
- 4) チームワーキングスタイルの授業から、明確にされた各々の役割を果たさなければチームワークが取れないことなど、チームワークと個々の役割を全うする力を身に付けること。
- 5) モノづくりのプロセスの体験を重ねることで、それが次のステップのための知識・技術になり、回を重ねるたびに自分の成長が感じられ、自信につなげること。
- 6) プロセスの体験を得ることで、4年次の卒業研究に向けて、自ら「企画・デザイン・設計からモノのプロトタイプ完成まで」、プロセスに沿ったモノづくりの計画が立てられるようになること。

下図は2014年度の例ー本格的導入ー (2012年度はトライアル、2013年度は応用)

授業風景



この事例に関する報告書、ウェブサイト等

1) 神奈川新聞 (2013. 6. 4) の例

「キャンパスナビ」という学生の取組みを紹介する枠で、学生の紹介記事が掲載された。

2) 学会発表

2012年度からの取組み開始に伴い、実習成果をアウトプットすることを目的として、学会発表を心掛けている。以下にそのリストを示す。

1. 2013年度の学会発表3件 (2012年度の成果をベースとして)

- ・ 日本教育工学協会：1年間の創造デザイン実習におけるエンジニアリング・デザイン教育の試み
- ・ 日本機械学会：創造デザイン実習におけるデザインと工学の融合教育
- ・ 日本設計学会：PBL型実践教育「創造デザイン実習」におけるCAD技術の有効利用

2. 2014年度の学会発表3件 (2013年度の成果をベースとして)

- ・ 日本教育工学協会：「デザイン思考」を応用したPBL型創造デザイン実習の試行
- ・ 日本機械学会：創造デザイン実習におけるデザイン思考の試み
- ・ 日本設計学会：PBL型「創造デザイン実習」の取り組みと科目間連携

3. 2015年度の学会発表4件 (2014年度、または2012～2014年度の3年間を通じて成果を発表。予定含む)

- ・ 日本教育工学協会：工学系ものづくり実習におけるコミュニケーション形成に関する一考察
- ・ 日本教育工学協会：工学系ものづくり実習におけるコミュニケーション形成に関する一考察～SNSと学修ポートフォリオを併用したコミュニケーション形成の実践例～
- ・ 日本機械学会：PBL系実習科目「創造デザイン実習」におけるチームビルディングの工夫
- ・ 日本設計学会：PBL型「創造デザイン実習」におけるモノづくり教育の試み
- ・ 日本デザイン学会：PBL型「デザイン実習」におけるデザインと工学の融合教育の試行

●必修科目●デザイン思考等を導入した PBL 型授業

その他の特記事項

- 授業時間で補えない（正規の時間だけでは完成しない）... モノづくりの時間との闘い
- 学生が自ら、授業時間以外に積極的に大学に残ってチームで話し合ったり、モノの完成に向けて時間を作っていったこと
 - ⇒自分たちの時間を使って完成させたものは、結果的に彼ら自身の大きな達成度につながった（学生談）
- 上記の学生実感につながった一要因として考えられること
 - ⇒「サイボウズ Live」という、無料の SNS 機能を持つグループウェア・ソフトの活用を試みた。目的は「プロジェクトマネジメント」の意識を学生に持ってもらうことであった。これは非常に成功したと考えている。

Sojo International Learning Center (SILC)の全科目

崇城大学

総合教育 Self-Access Learning Center (SALC)

Scott Crowe, Kayoko Horai, Yoko Kinoshita, Yui Sawatari (職員)

受講生数	主に全学の1・2年生 (約 1600 名)
科目の位置づけ	SILC の英語授業のための自律学修をサポートするセンター
科目の到達目標	「授業だけでなく、もっと英語を勉強したい」「夏休みに海外に行くので会話を練習したい」など、一人ひとりのニーズに応えるため、豊富な英語の教材を揃えている。「聞く、読む、書く、話す」のうち、自分の苦手なところを、好きな時間に、自分に合ったペースで学習できるようにサポートする。

本学では平成 22 年度より、グローバルに活躍できる技術者育成を目指して、英語教育の抜本的見直しを行い、15~16 名に及ぶネイティブの教員による英語教育施設 SILC を立ち上げ、講義はすべて英語で行うコミュニケーション重視の英語教育を行ってきた。SILC では、英語を母国語としない国の学生に英語を教育するための学位を有したネイティブの教員が、全学（工学部・情報学部・生物生命学部・薬学部・芸術学部）の1・2年生に対して、週2コマ必修でコミュニケーション中心の英語を、1クラス25名程度の少人数クラスで実施している。また同時にアクティブ・ラーニングのための SALC の施設も設置し、専任教員・職員を配置して、独自の英語教育の自律学修プログラムを構築してきた。SALC は、開設当初こそ年間の述べ利用者数が約 1,500 人（全学学生数約 3,500 人）であったが、開設4年目の一昨年度は、年間約 18,000 人にまで増大し、本学学生の自律学修マインドの育成に貢献してきた（図参照）。

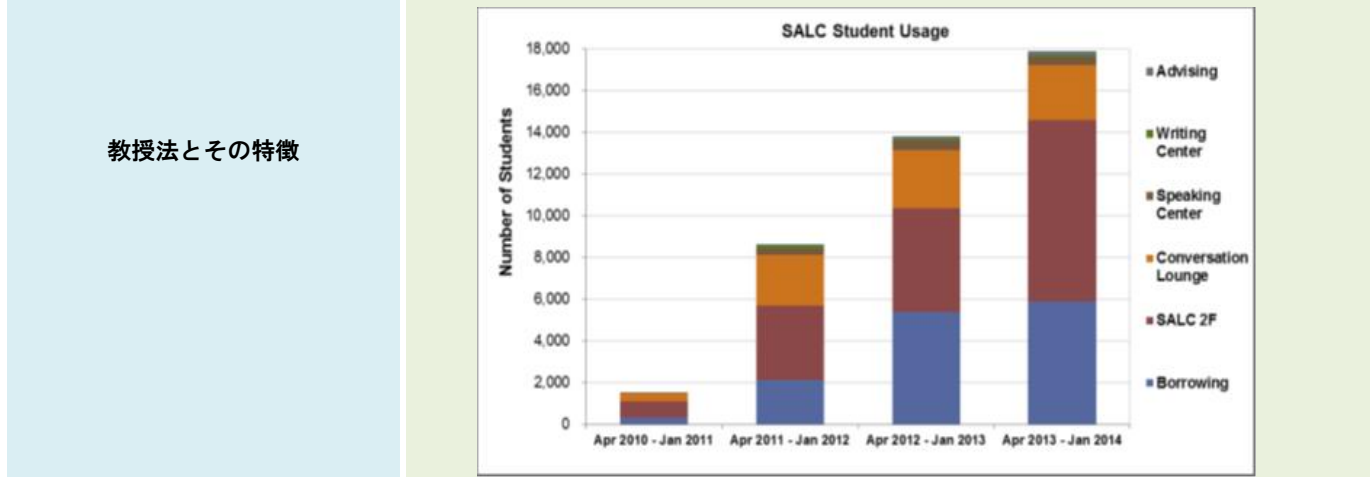


図 SALC 利用者数の増大

この SALC の利用者数の増大には、次の3つの教授法（ノウハウ）が関与していると思われる。

①DVD や書籍などの様々な英語教材と設備を備え、ICT(Moodle)を活用した講義外の自律学修ができる。(SALC の設備を活用すると SALC ポイントカードにポイントが付与され、豪華賞品 (?) と交換される)

②ラーニングアドバイザーが3名・専従職員が1名常駐し、学習アドバイジングスキル

●英語●ネイティブの教員と英語教育施設を活用した自律学修プログラム

を活用して、教材の選定や学習方法の助言（主体は学生）を行う。この学習アドバイジングは多種多様化する学生ニーズやレベルにあったオーダーメイドの学習計画を立て進めていく。学生による PLAN（計画する）→ACT（実行する）→REFLECT（振り返る）のサイクルを回していく教授法の一つである。

③SALC アクティビティーを独自に作成し、学生が利用した分を 10% SILC の成績に反映する。SILC の成績は 90% で残りは SALC のアクティビティーとなる。このアクティビティーには、SALC の教材（日本のマンガの英訳版や吹き替えのない映画 DVD など様々なものが用意されている）を読んで答えるものもあれば、ラウンジで SILC の教員と英語でゲームや会話するなど様々なものがある。

以下、SALC のサービス・設備を具体的に紹介する。

1. ADVISING SESSION : アドバイジングセッション

SALC には専任のラーニングアドバイザーとよばれる教員が常駐している。英語学習に関する悩みや質問に答えるのはもちろんですが、学生の学習計画を一緒に立てたり、学習過程における学習者の振り返り、学習継続のためのサポートなども行う。

2. SALC COUNTER : SALC カウンター

SALC の使い方がわからない場合は、SALC カウンターへ行く。SALC のスタッフは学生が抱える全ての質問や問題にやさしく対応する。マルチパーパスルーム、スピーキングブース、またアドバイジングセッションの予約はネットで可能だが、SALC カウンターでも受け付ける。さらにお昼休み時間にはラーニングアドバイザーがカウンター横でサポートデスクを設け、学習者の SALC 利用法での質問や、学習に対する質問等に気軽に日本語でも対応するシステムがある。

3. GROUP ACCESS AREA : グループアクセスエリア

グループ課題を行うのに便利なエリア。自分のノートパソコンを使用することもできる。ミーティングを行いながら、プレゼンテーションの準備など作業が進められる。（SILC/SALC では様々な英語によるコンテストが催されている。）

4. COMPUTER ACCESS AREA : コンピュータアクセスエリア

コンピュータアクセスエリアにあるパソコンは全て英語仕様！TOEIC や文法のソフトウェアが導入されているので、スキルアップ、スコアアップ間違いなし！

5. SPEAKING BOOTHS : スピーキングブース

スピーキングブースは、発音を練習するブース。完全防音になっているので、周囲を気にせず練習できる。

6. LISTENING STATIONS : リスニングステーション

リスニングステーションでは、リスニング教材で聞く力をアップ！学生の大好きな洋楽も豊富に揃えている。

7. READING AREA : リーディングエリア


リーディングエリアは、日本のマンガの英語版やレベル別の小説など、様々な話題の英語書籍を楽しめる快適な空間である。ゆったりとしたソファと静かな環境で、英語での読書が楽しくなる。

8. MULTI PURPOSE ROOMS : MPR (多目的ルーム)

MPR の使い方は様々。友達同士でプレゼンテーションの準備や映画を見ることが出来る。さらには、英語のカラオケも！

特定の回の授業の流れ

●英語●ネイティブの教員と英語教育施設を活用した自律学修プログラム

	<p>9. EDUTAINMENT BOOTHS : エデュテイメントブース</p> <p>映画も英語を学習するための楽しい教材である。海外のドラマ、アニメーションを豊富に揃えている。英語字幕を見ながら、リスニング力、会話力をアップさせる！</p> <p>10. GALLERY : ギャラリー</p> <p>ギャラリーをどう使うかは学生次第。座ってランチを食べたり、友人同士で会話を楽しんだり、クラブやサークルの仲間とイベントを開催したりと、ここは学生が自由に使用できる空間である。</p> <p>11. 不定期開催でワークショップなどもあり、Charismas の飾りを作成したり、海外のお菓子を作ったりといったクラフト系のワークショップや TOEFL/TOEIC 試験についてのワークショップ、また TOEIC 講座なども開催している。</p> <p>12. 学生主催の様々なイベント（七夕、ハロウィーン、クリスマスパーティー等）では英語でのゲームを学生が考え、学生がクラス外で様々な教員と英語で話す機会となっている。</p>
<p>評価方法</p>	<p>SALC は自律学修センターなので、評価は行わないが、ここで自律学修した成果は、上述したように SILC の成績に反映される。</p>
<p>学習成果</p>	<p>現在、大学では、SILC/SALC での学習成果を、教育改革の検証作業の一環として行っているところである。</p>
<p>担当教員のこの授業に対する思い</p>	<p>通常のクラスは教師が何を学習するか、どのように学ぶかなど様々な学生のレベルを考慮して決めるが、SALC では学習者自身が自分の学習に責任を持って取り組むよう促している。何をするか、いつするか、誰とするか、学習者が自分で決めて行うことにより学習に対してより、積極的に能動的に取り組めるようになることを望む。</p>
<p>授業風景</p>	

●英語●ネイティブの教員と英語教育施設を活用した自律学修プログラム



この事例に関する報告書、ウェブサイト等

<http://www.sojo-u.ac.jp/silc/index.html>

その他の特記事項

本学の SILC/SALC の取組みと学生の SALC 利用者数の増大と SALC のノウハウをもとに、これを全学の専門教育に普及させる取り組みが、平成 26 年度大学教育再生加速プログラム（AP）アクティブ・ラーニングに採択された。

●演習● 2年次生が1年次生に教える

基礎セミナーⅠ（1年前期）、基礎セミナーⅡ（1年後期） 基礎セミナーⅢ（2年前期）、基礎セミナーⅣ（2年後期）

東北文化学園大学

医療福祉学部／リハビリテーション学科・理学療法学専攻

藤澤宏幸・吉田忠義

受講生数	各科目とも約80名
科目の位置づけ	理学療法士としての基本的態度と技術を学ぶ
科目の到達目標	基礎セミナーⅠ・Ⅱ（合同授業6回／15回） <ul style="list-style-type: none">・体表解剖を理解し、筋・骨格の触診ができる・身体運動学の基礎を理解し、起居動作および移乗の介助ができる・初学者に対する基本的指導方法を説明できる 基礎セミナーⅢ・Ⅳ（合同授業4回／15回） <ul style="list-style-type: none">・不特定の対象者に対して適切な触診ができる・不特定の対象者に対して適切な介助ができる・初学者に対して適切な指導が出来る
教授法とその特徴	基礎セミナーⅠ（1年前期）と基礎セミナーⅢ（2年前期）、基礎セミナーⅡ（1年後期）と基礎セミナーⅣ（2年後期）をペアとして、2年次生が1年次生へ教えることを基本的コンセプトとしている。担当教員が全体をコーディネートし、2年次生へ基本的指導方法を教授したのち、自分たちで授業計画を立て、資料作成などの準備を経て、実施の授業に臨む。 1) 基礎セミナーⅠ & 基礎セミナーⅢ <ul style="list-style-type: none">・体表解剖の基礎を確認する・骨標本等を用いながら、骨指標の仕方を確認する・体表から触知できる筋の起始停止・走行を可能な範囲で確認する・筋の関節に対する作用を理解する 2) 基礎セミナーⅡ & 基礎セミナーⅣ <ul style="list-style-type: none">・教員作成のテキストをもとに介助技術の基本を確認する・健常者における起居動作および移乗動作の運動パターンを観察する・被介護者を持ち上げないで、運動を補助する方法を修得する
特定の回の授業の流れ	1) 上級生に対して ①基礎セミナーⅢ（合同授業前の準備） <ul style="list-style-type: none">・3回（6時間）：触診技術と機能解剖学に関する基礎知識の確認を行う。 上肢、体幹、下肢に分け、骨指標の確認方法、筋の起始停止・走行・作用について復習する。・2回（4時間）：6回分の指導計画を立案する。

●演習● 2年次生が1年次生に教える

	<p>通常は上肢、体幹、下肢を各2回に分けることが多い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計5回（10時間）の準備の後に、1年次生への指導に当たる。 <p>②基礎セミナーⅣ（合同授業前の準備）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3回（6時間）：担当教員により基本的な技術を再確認したのち、4回分の指導計画を立案する。 ・その他の時間については、臨床実習に関するオリエンテーションなど、医療人としての態度の教育を行う。 <p>2）1年次生に対して</p> <p>①基礎セミナーⅠでは、2年次生が準備期間の間、自校教育、アカデミック・スキルについて学ぶ。また、ボランティア実践、グループワーク（仙台市内のバリアフリー調査）についても行っている。</p> <p>②基礎セミナーⅡでは、合同授業前に担当教員が触診技術について間違っていて理解していないかを確認し、あらためて教授する。また、介助技術の基本について事前に教授し、2年次生からの指導が円滑に進むよう支援する。その他の時間では、アカデミック・ディベートを実施している。</p>
<p>評価方法</p>	<p>基礎セミナーⅠ：合同授業に関して直接の評価はせず、他の課題で評定をつける。</p> <p>基礎セミナーⅡ：触診に関する基本を実技試験で確認する。</p> <p>基礎セミナーⅢ：触診に関する技術を実技試験で確認する。</p> <p>基礎セミナーⅣ：介助に関する技術を実技試験で確認する。</p>
<p>学習成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2年次生は初学者への指導およびその準備をとおして、自己の学習の到達度を知り、また知識・技術の向上が成果として得られている。 ・1年次生は、身近な存在から指導されることにより、知識・技術の必要性をイメージしやすい。また、次年度には自分たちが指導する立場になることを意識して、学習に意欲的になり、知識・技術の修得が進んでいる。
<p>担当教員のこの授業に対する思い</p>	<p>知識・技術は他者へ伝える作業を通して、より確実なものへととなります。2年次生は1年次生へ指導することを通して、自分の知識・技術を確認し、不足に対する内発的動機付けを得るものと考えます。また、臨床実習において対象者への指導に関する良いモデルケースとなるはずで。</p> <p>一方、1年次生は身近な存在である2年次生から教わることにより、明確な学習目標をイメージできること、態度・振る舞いについても先輩を手本とできることがメリットとしてあげることが出来ます。</p> <p>総じて、社会に出てからも同じ専門領域で関係性が継続される仲間としての意識が芽生えることも、学生生活を送るためにプラスになると考えております。</p>

●演習● 2年次生が1年次生に教える

授業風景



触診技術の演習



起居動作の介助技術

この事例に関する報告書、ウェブサイト等

・藤澤宏幸, 他: 初年次教育からのコミュニケーション能力の開発. 東北理学療法教育 10(1):31-34, 2012.

中村学

中村学園大学

栄養科学部・教育学部・流通科学部

中村理事長、甲斐学長、講談師神田紅師匠、本学名誉教授、

卒業生（タレント山本華世氏他）、占部賢志（教育学部教授）、古相正美（教育学部教授）

受講生数	約 80 名
科目の位置づけ	政策学分野の「基幹科目」に位置付けられ、「基本科目」（必修科目）の単位取得後、次の段階の学ぶ科目となっている。
科目の到達目標	①政策プロセスにおける基礎的な知識、理論を修得すること ②現代の政治経済問題について、課題を発見し、課題を設定し、具体的な解決方法を政策プロセスの視点から提案することができること。
教授法とその特徴	<p>学外のパートナーと連携し、教室内での学びと教室外でのサービスラーニングを組み合わせ、学生にとって、現実的な問題について理論的フレームワークを通じて検証、分析を行い、具体的に現実的な問題に関与しながら、課題解決に取り組む、新たな「気づき」を得ていく。</p> <p>そのための具体的な方法としては、『<u>ワークショップ方式</u>』を活用している。『ワークショップ形式』は、「思考」や「省察」を経て「知識」と「経験」に統合による新たな知識創造プロセスを生み出す教授法である。知識をインプットする機会、経験の機会、省察の機会を設けたとしても、そこに知識と経験の統合が促進されるプロセス（知識創造のプロセス）を考える必要がある。そこで知識と経験を「思考」というプロセスという『ブリッジ』を『ワークショップ形式』は提供するのである。私の『ワークショップ形式』では、①「知識・情報を知る」、②「話し合う」、③「気づく」、④「表現する」というサイクルを学びのプロセスとしていくことが特徴である。</p> <p>また、こうした『ワークショップ形式』を実施する際には、「多様性」と「エフォート・コミュニケーション」が重要なカギとなる。つまり、学生にとって「エフォートレス」なコミュニケーションは、社会人基礎力やコンピテンシーを高める機会を提供しない。そこで、学外のパートナーなど多様な存在が、学びのプロセスに関与し、学生にとって「ハイ・インパクト」な環境を創り出す必要がある。そこで、学外の関係者を授業に参加してもらうような工夫も行っている。</p> <p>15 回の授業を通じた授業デザインを行い、その中で学生の問題関心を掻き立て、学びの意欲を高める工夫や深い学びに誘う工夫を行っている。</p>
特定の回の授業の流れ	<p>2015 年 4 月の統一地方選挙前には、投票行動、選挙について学ぶための授業を行った。具体的には、千葉県選挙管理委員会に協力を得て、実際の「投票箱」、「投票用紙」を活用して、「模擬投票」を実施し、その上で、「ワークショップ形式」で学びを深める工夫を行った。</p> <p>授業前には、学生たちが統一地方選挙の立候補予定者を集め、公開討論会を実施した。その内容を動画で保存し、インターネットで視聴できるようにした。これが授業の事前学</p>

●教養科目●メリハリをつけたオムニバス講義・グループディスカッション

習教材となる。当該回の教材は、学生自らが教材を作成することになった。そして事前学習として、このビデオ動画を確認した。

当該回の授業は、千葉市選挙管理委員会の協力を得て実施された。授業の冒頭に、千葉市選挙管理委員会から、選挙制度等に関する説明があり、選挙制度について学ぶとともに、実際に配布されている「選挙公報」を学生が読み、学生同士でディスカッションを行った。

また教員から民主主義に関する理論について解説を行った。

その後、実際の素材を使った「模擬投票用紙」、実際の「投票箱」、「記載台」、「投票用紙発券機」を利用し、模擬投票を行った。投票後は、実際の計数機を活用し、開票を行った。

開票結果を踏まえ、教員から投票率が低下した場合の課題等の解説を行うとともに、議論の材料を提供した。ここまでが①「知識・情報を知る」のプロセスとなった。

そして、「投票率を向上させるためのアイデア」について、学生同士のディスカッションを通じて、②「話し合う」、③「気づく」のプロセスを通じて、投票行動や選挙制度、民主主義について考え、学んだ。そして、ディスカッションの内容を④「表現」し、学生同士のディスカッション内容を教室全体で共有し、授業内容をまとめた。

事後学習として、模擬投票の感想やディスカッション内容を整理し、レポートにまとめることで「省察」を行う内容とした。

評価方法

本授業の評価方法は、基本的には、論述試験による到達度の確認を行っている。授業で学んだ知識、理論に基づき、現実の問題を捉え、課題を発見し、発見された課題の解決方法を検討できているかどうかを確認する。また必要に応じて、「ルーブリック」も活用し、学生が獲得したコンピテンシーの習熟度も把握する。

学習成果

本授業の学習成果として、政治、政策過程に関わる基本的な知識や理論を修得することができた。またこうした知識や理論も、知識や理論として修得するだけでなく、「模擬投票」などの体験型学習、『ワークショップ形式』を活用した知識創造のプロセスを通じて、学生のコンピテンシーを高めるとともに、課題発見力、課題設定力などの「活きた」知識やスキルを修得することができた。

担当教員のこの授業に対する思い

担当教員は、いかに学生の授業や学ぶべき学習内容に興味・関心を持たせ、さらに主体的な学習者として、いかに深い学びにつなげるか、ということ意識しながら授業の教授法を検討している。そして、授業で得た学術的な知識、理論を実社会の中で、課題を発見し、課題を設定していくための「実学的な知識」として修得させるか、という点に重点を置き、工夫を行っている。

そのためには、学生にとって「ハイ・インパクト」な経験、体験を提供し、自らの学問的な関心を涵養するような工夫を行う必要があると考えている。そうした問題意識や関心が高い学生が困難なレベルの学習でも自発的に挑戦し、学びを深めるためのエフォートを努力することが経験上、確認されている。

授業風景



この事例に関する報告書、ウェブサイト等

4月9日（木）のNHK「おはよう日本」内で紹介されるとともに、同日の千葉日報で記事が掲載される。

事前学習教材：「公開討論会の内容」

<http://www.soc.shukutoku.ac.jp/shumpei/chibademo2015top.html>

その他の特記事項

本授業に関連して、淑徳大学コミュニティ政策学部矢尾板俊平研究室は千葉県選挙管理委員会と連携し、2014年度から主に若年層の投票率を向上させるための活動として、「ちばでもワークショップ」、大学生が候補者役となつての小学校での模擬投票に取り組んでいる。本年度は、選挙権が18歳以上に引き下がったことにより、高校での模擬投票に取り組む予定である。また2014年の衆議院総選挙、2015年の統一地方選挙においては、立候補予定者へのインタビューを実施し、動画インタビューページの制作、選挙戦のフィールドワーク等も行っている。

「ちばでもワークショップ」には、今回、取り上げた授業の履修者も「政策学概論」（1年次後期）の受講者として参加しており、1年次後期、2年次前期という垂直的な科目間連携となり、ラーニングコミュニティを形成しながら、ある程度、共通のテーマを持ちながら学ぶことができる工夫をしている。

●必修科目●1年時に習得した知識や技術を、事例を用いた支援での活かし方を身に付ける

レクリエーション援助

文京学院大学

人間学部人間福祉学科

奈良 環

受講生数	29名
科目の位置づけ	<p>本科目は、人間福祉学科における介護福祉士資格取得のための必須科目であり、通年（30コマ）で行われる。介助の根拠を押さえながら、本学科のディプロマポリシーである、「尊厳のある自立した生活を送ることを可能にする」ための支援方法について学ぶものである。レクリエーションは楽しみとして行われる、自発的で創造的な人間活動であり、対象者の活動の意欲を高めるという意義がある。</p> <p>したがって、レクリエーションとは言っても、本科目ではゲームやスポーツ等を指すのではなく、レクリエーションの基礎となる生活支援技術について学習するものである。つまり、高齢者や障がい者の外出に際しての身だしなみへの援助、外出のための基本的な介助技術、福祉用具の知識や使用方法を習得する。</p> <p>本科目は2年次に配当されている。受講生は、1年次の前期から後期に支援に必要な基礎的な知識、技術の講義を受け、また、後期には高齢者施設及び在宅介護の2つの実習において実際の利用者への介助を経験している。そこで、本科目は知識と技術が実習を経て融合された2年次にて履修される。</p>
科目の到達目標	<p>社会参加としてのレクリエーションについての意義、社会性を保つことの意味を理解し、対象者の活動の意欲を高め、その人らしくハリのある生活を営むための支援を考え、その支援を実施するための技術を習得する。</p> <ol style="list-style-type: none">1.社会参加をすることの意義を理解することができる。2.社会参加につながる身支度のアセスメント、自立に向けた個々の状態に合わせた支援ができる。3.社会参加につながる、移動、移乗のためのアセスメント、自立に向けた個々の状態に合わせた支援ができる。4.記録や観察したことを文章化し、自立した生活を維持するための他職種とのより良い連携に活かすことができる。

●必修科目●1年時に習得した知識や技術を、事例を用いた支援での活かし方を身に付ける

教授法とその特徴

本科目の大きな特徴は、利用者個々の状態に合わせた自立に向けた支援をする力、社会で必要とされる課題発見能力、課題解決能力を育てるところである。

実際には、まず教員が、外出を希望する利用者の状態や状況を事例として提示する。1年次に体験した基礎的な実技の復習、移動移乗等の新しい知識、技術の実践を行った上で提示した事例に必要なとされる知識や技術を選択し、事例の介護プランに反映させていく。その経過の中で自己課題が明確になり、体験を通した学びのサイクルが可能になる。

習得した知識や技術を、事例を用いた支援の一連の流れの中で学生が自ら活用できる場面を考え、選び、支援を行うための準備だけでなく、更に必要とされる知識、技術についても自ら気づけるよう構成されている。グループワークによるアクティブラーニングを導入したことで、学生は調べ、話し、書き、発表という一連の経過をたどり、習得した支援技術や知識を定着させ、実際の支援での活かし方を身に付けることができる。この学びの体験が、課題を発見しそれを解決するという力を育むと考える。

また、介護現場での実習として長期的に行われるのは施設においてであり、自宅などの設備が整っていない環境での介護については、学生は体験しにくいのが現状である。自宅で生活する高齢者や障がい者の事例検討を行うことで、地域での支援、技術の応用などについても考えるきっかけとなっている。

1回～10回

身だしなみや外出の意義、目的、1年次の復習と福祉用具等を用いた外出支援についての新しい知識、技術の習得をする。

11回～30回

地域で生活する高齢者の事例を提示した上で、1年次で体験している、移動移乗の技術、姿勢保持や車いす介助、杖歩行等の基礎知識と技術について確認し、それらの技術を事例の支援に活かしながらグループワークを進め、検討した支援事例についてプレゼンテーションを行う。

知識の習得：教科書、資料等を使用しながらの講義

技術の習得：学生同士が支援者役と利用者役を交互に行い、支援技術を習得する。

事例検討：外出する目的、根拠、対象者の尊厳を守りながら、どこに、どのようにして外出するかについてグループで話し合う。生活支援のための身体介護技術だけではなく、ボランティアなどの地域の資源や車イスでタクシーを利用する方法や費用等、外出に必要なさまざまな知識をインターネット等で調べる。また、実際に車いすで歩道を歩いてみる、介助してみる等、地域に出て必要な情報を得て、事例の外出プランに落とし込み、それらについてのプレゼンテーションを行う。

事例の提示と事前準備

- ・高齢者の事例の提示。（疾病や生活歴、生活状況、住居の間取りなども含めた情報）
- ・パソコンなど情報収集や事例検討、プレゼンテーション資料作成に必要な物品、環境の準備をする。

特定の回の授業の流れ

本講義は26/30回目の講義となる。座位移動、移乗のためのスライディングボード使用について原理原則を押さえた上で、外出支援をテーマとした事例の中での効果的な使用ができるか、使用するにはどのような準備や環境整備が必要であるかを各グループで話し合ってもらってまとめる。

●必修科目●1年時に習得した知識や技術を、事例を用いた支援での活かし方を身に付ける

	<p>1) 導入 (10分)</p> <p>座位移動を取り上げ、本日のテーマの説明し、演習内容の説明と時間配分について確認を行う。(テーマと時間配分は板書しておく)</p> <p>2) 展開 1 (30分)</p> <p>資料をもとに座位移動について説明する。実際にグループごとにスライディングボードを使った車イスへの座位移動の支援の演習を行う。</p> <p>展開 2 (25分)</p> <p>外出プランをグループで見直す(座位移動での注意点、事前の確認事項)既に作成している外出プランの移乗が必要となるポイント、想定される環境、事前に確認が必要があることなど、各グループで話し合いを行う。</p> <p>3) まとめ (25分)</p> <p>安全、安楽な座位移動で気を付ける点について実際の外出支援での役立て方の確認、評価票の記入、演習室の掃除、利用者用ベッドの原状復帰、次回の授業の内容と思いつくポイント(既に講義や演習で行っているところ)を伝える。</p>
<p>評価方法</p>	<p>30回のうち、前半15コマ分に関しては知識に関するテストを行い評価した。車椅子などの福祉用具に関する知識、身だしなみ等の意義や目的、必要となる知識、障がい別の基本的な外出支援のための知識を問うた。</p> <p>後半の15コマに関しては、知識を振り返りながら、具体的な支援方法についてグループで事例検討を行い、プレゼンテーションを行った内容の評価、及び、個々に課すレポートにて評価を行った。</p> <p>評価の視点としては、根拠のある支援の方法、気付きの深さ、自己課題の発見、課題の解決方法の具体的提示等があげられる。</p>
<p>学習成果</p>	<p><u>特定の回の授業についての学生評価</u></p> <p>授業後の学生の感想からは、支援技術の習得が支援の一部であり、支援を行うための準備や確認の大切さを実感したとの記述が多く、本当の意味での個別の支援について考えることができていた。(感想①～⑥)</p> <p>そして、施設のような整った環境ばかりでなく、地域生活の中での不便さ、危険の度合い、臨機応変に対応するためのさまざまな知識の必要性を実感していた。(感想⑩、⑪)</p> <p>知識や経験の足りなさなどの自己の課題に気づけた学生もいた。(⑥、⑦、⑪)</p> <p>また、頭で考えるだけでなく、自らの体と時間とを使って細かな確認をする、行動することの大切さが身についていた。(感想⑨)</p> <p>(学生の授業の感想から)</p> <p>①普段の生活を知っておくこと、事前の準備や家族への確認が必要だと気付いた。</p> <p>②歩道を走ってもヒヤッとした。実際に車イスに乗って気付くことが多かった。</p> <p>③確かめなきゃいけないことがたくさんあると気付いた。</p> <p>④場面を想像して、徹底的に準備することが大切だと気付いた。</p> <p>⑤もしもの時まで考えることができた。</p> <p>⑥確認することや、配慮することがたくさんあって、今までの自分自身の見立てる力、想像する力のなさに気づくことができた。</p> <p>⑦予測して考えることに関して、グループで行ったことで視野が広がった。</p> <p>⑧楽だと思っていたのに、長時間車イスで移動したら、負担が多く、実はあまり楽ではな</p>

●必修科目●1年時に習得した知識や技術を、事例を用いた支援での活かし方を身に付ける

いと気付いた。

⑨福祉用具一つでも、どの場面でどう使うかわかっていなければ、有効活用できないとわかった。

⑩机上では気づけない、実感できないことが多々あった。実際に外に出てみる、その場の生の情報の大切さに気付いた。

⑪施設等の環境が整った場所での介助ではなく、地域社会における個々の住居での介助の難しさ、確認すべき点、工夫、応用力が必要であることに気づいた。

通年の授業評価としての授業アンケートの結果

「科目として十分な力が付いたと思うか」については、90%以上の学生が「強くそう思う」または「そう思う」と回答しており、「今後の生活に役立つか」については95%以上の学生が「つよくそう思う」または「そう思う」と回答している。何のために学ぶのか、生活支援技術の使い道について理解が進んだ結果と考える。

担当教員のこの授業に対する思い

本学の介護福祉士コースは、ソーシャルワークをベースに学んでいる。そのため、介護福祉士として対象者に行う生活支援技術だけではなく、対象者の地域生活を考え、生活を継続するための支援に強い人材となつてほしいと考えている。

また、利用者の個々の状態に合わせた自立に向けた支援をするには、自ら課題を発見し、解決していくことが求められる。安全・安楽なベッドから車イスへの移乗のための知識、技術を習得し、事例を用いて個々の状態に合わせた自立支援について話し合う中で、学生は、介助を行う際の技術的な課題だけではなく、地域で生活する場で行う支援としての可能性や難しさを実感し、それらを解決するためにさまざまな検討を重ねる。そういった学びが、いずれは介護現場のリーダーとして現場をけん引するための、根拠をもって他者に伝える力、教える技術、職場改善につながる課題発見能力と、課題解決能力の素地となるよう願っている。

授業風景



学修の基礎Ⅱ（コミュニケーションスキル）

明海大学

外国語学部・経済学部・不動産学部・ホスピタリティ・ツーリズム学部
授業担当 8 名（前学期 36 クラス 後学期 21 クラス）

科目の位置づけ	<p>明海大学浦安キャンパスでは「基礎教育」「人間力形成教育」「キャリア形成教育」「専門教育」の4分野で授業科目を構成している。「基礎教育」には「学修の基礎（Ⅰ～Ⅲ）」という1年生対象の必修授業がある。この「学修の基礎Ⅱ」はコミュニケーションスキルの向上を目指すものである。スタディプロモーション、数理スキル、情報リテラシーなどを学ぶ他の学修の基礎科目と併せて、大学における学びの基礎を培う役割を担っている。</p> <p>本科目で養成するコミュニケーションスキルとは、情報を的確に理解し、正確かつ能率的に表現・伝達することができ、かつ自己の意見や要望を他者に違和感なく受け入れさせることができるという意味での日本語能力である。</p>
受講（登録）学生数	877 名（2014 年 4 月現在）
科目の到達目標	<ul style="list-style-type: none">基本的な漢字・語句について正しく理解、表現できるようになる。論理的な思考により、伝えたい内容を分かりやすく表現できるようになる。入門書レベルの文章を読んで大意を把握できるようになる。場面情報、言語情報を正確に把握したうえで、適切な対面コミュニケーションができるようになる。
教育方法の特徴	<ul style="list-style-type: none">「論理的思考力・表現力」「会話」「語彙」の3領域を設定批判的思考に基づく論理的思考・表現のプロセスを反復し学びの成果を実質化：知識の理解から文章作成へ、主張の組み立てから論理性の検討へ、と段階を踏んで活動を配置。これらをブックトークとプレゼンテーションという2回の発表により認知的プロセスを繰り返し経験させる。批判的思考の認知プロセスを外化：「立場」「理由」「証拠」の3階層からなるロジックツリー、異なる立場の視点を取り入れるバタフライチャートなどの思考を視覚化するためのツールを使用。他者の視点を取り入れて思考を深めるためのピアインストラクション：ピア活動を、文章やプレゼンテーションの作成プロセスに入れた。ルーブリックの導入による自己修正能力の育成：文章作成・プレゼンテーションにルーブリックを導入。能動的な自己修正を促す。事前学習と授業活動の連携：「会話」「語彙」領域の知識の獲得はテキスト、配付資料による事前学習、授業では活動（会話、書く）。授業外学修時間を保証するために課題提出、小テストを成績評価に組み入れた。他者性をベースとしたコミュニケーションを学ぶための視聴覚教材の利用：学生が親しんでいる共同性をベースとしたコミュニケーションとは異なることを視聴覚教材で示した。
教室空間の特徴	可動式機の教室と PC 教室、図書館の PC スペースの併用：

●共通科目基礎教育●論理的思考・表現のプロセスを反復、ロジックツリー等のツールを使用など

学習者間の意見交換等に便利な可動式機の教室と、プレゼンテーションの主張の根拠となる客観的データを収集したり、プレゼンテーション資料を作成したりするためにPC教室、図書館のPC教室を活用。

特定の回の授業の流れ・時間配分

最初の15分程度は、事前学修の提出物（漢字・語句、会話）の回収と解説、確認のための小テスト実施、会話視聴覚教材の視聴と解説。「第11回プレゼンテーション1論理の指摘」の回では、15分程度、教科書の説明にあてはまるような例を学生に挙げさせ、説得力にける論理について理解を深める。10分程度でロジックツリーを使って論理性を確認する方法を学び、20分程度で自分のプレゼンテーションの論理性をロジックツリーで相互にチェックし合う。

バタフライチャートで自分とは異なる立場の意見を想定した主張を展開する方法を10分程度で学び、20分程度で自分のプレゼンテーション用にバタフライチャートを作成し学生間で相互チェックする。

授業で特に使用しているツールとその活用法

ロジックツリー

全体的な論理的つながりのチェックに使う。

- 階層間のつながり：A) 主張に対して妥当な理由か、B) 理由に対して妥当な証拠か、等
- 階層内のつながり：C) 理由同士の漏れ、D) ダブリがないか等

学習成果
(学生は何ができるようになったのか)

1. 質の高い意見文を作成することの意識が高まった。
2. 日本人学生、留学生ともに、論理的思考（要約、表現訂正、図表説明、知識、意見文作成）、会話（談話完成）の問題で、第1回から期末にかけて有意に成績が伸びた。

学習成果の評価・測定の方法

1. **意見文を書くことへの意識調査**

前学期1年生138名を対象に、意見文作成（ブックトークとプレゼンテーション活動）に関わる授業の主観的効果を検証することを目的として、学修の基礎Ⅱの授業外で意見文を書くときの意識を問うアンケートを意見文作成の活動前と活動後に実施（表1を参照）。アンケートの回答は5段階（5：いつも行う～1：しない）で1つを選択。図1は学習者が評定した値を平均したものである。統計的分析の結果、すべての項目において活動前から後にかけて有意に向上していることが示された（ $p < .001$ ）。

表1 「授業外に意見文を書くときの意識」調査の項目

1	実際に文章を書く前に、思いつくことを書き出してみる
2	文章を書く前に構成を考えてから書く
3	序論・本論・結論の構造を意識して書く
4	中心文と支持文など文と文の関係を考えて書く
5	意見が明確になるように書く
6	意見に理由や根拠を書く
7	理由や根拠を書くとき、証拠となるデータや経験談を交える
8	文章全体のまとまりを意識する
9	文章を書いた後、読み直しておかしなところがないかどうか確認する
10	文体を使い分けて書く

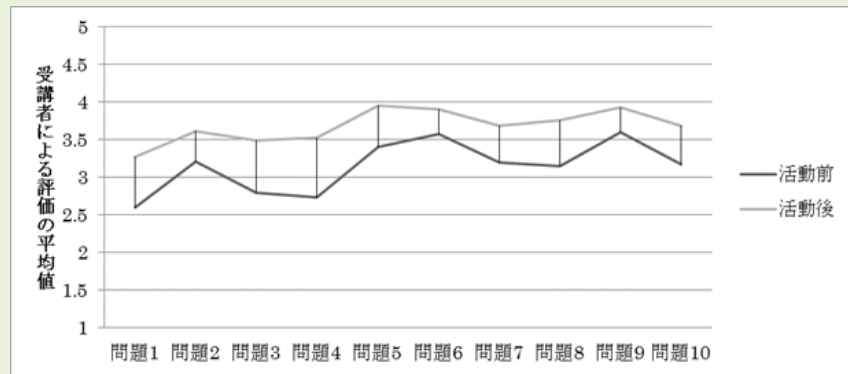


図1 意見文を書くことに関する受講者の意識調査における問題ごとの評定値

2. 第1回目(事前)と期末(事後)テストの結果比較

1年生446名(日本人学生390名、留学生60名)を対象として、日本人学生、留学生の前学期、後学期の事前事後テストの結果を比較した結果、ともに第1回目(事前)から期末(事後)にかけて成績が上がった($p < .001$)。

表2 2014年度の第1回目と期末テストの結果

学期	日本人学生			留学生		
	1回目(事前)	期末(事後)	伸び	1回目(事前)	期末(事後)	伸び
前学期	86.61点	108.65点	22.24**	50.17点	79.73点	29.56**
後学期	104.2点	124.7点	20.7**	60.5点	89.0点	29.50**

注) 200点満点

3. 日本人学生の問題別 第1回目(事前)と期末(事後)テストの結果比較

日本人学生の問題別得点比較より、論理的思考の3.文章構造問題を除くすべての問題で、第1回から期末にかけて成績が伸びたことが示された。(表3)論理的思考の3.文章構造問題の結果は、5点満点の1問(部分点なし)のため測定できていない可能性がある。会話の1.談話完成問題の結果は、有意に成績が伸びているものの全体的に得点が低い(下線部分)。

表3 2014年度の第1回目と期末テストの問題別の結果:日本人学生(点)

		前学期			後学期		
		1回目	期末	伸び	1回目	期末	伸び
漢字語句	1.読み(20点満点)	17.3	19.1	1.5*	17.4	19.5	2.1**
	2.書き(20点満点)	11.2	12.0	0.7**	12.9	13.9	1.0**
	3.語句(10点満点)	4.3	4.8	0.5*	5.30	5.7	0.4**
会話	1.談話完成(30点満点)	<u>9.0</u>	<u>10.9</u>	<u>1.9**</u>	<u>12.3</u>	<u>16.2</u>	<u>3.9**</u>
	2.知識(8点満点)	6.6	7.1	0.4**	6.7	6.9	0.2*
	3.表現訂正(12点満点)	7.6	10.2	2.6**	8.3	9.7	1.5**
論理的思考	1.要点把握・要約(25点満点)	8.9	12.4	3.5**	12.7	14.5	1.8**
	2.表現訂正(25点満点)	5.4	9.6	4.1**	10.1	13.0	2.9**
	3.文章構造(5点満点)	2.9	3.1	0.1	3.3	3.5	0.2
	4.図表説明(10点満点)	4.5	5.4	0.8*	4.6	6.3	1.7**
	5.知識(10点満点)	2.4	5.5	3.0**	3.7	6.0	2.3**
	6.意見文作成(15点満点)	5.7	8.2	2.4**	6.9	9.6	2.7**

注) **は $p < .001$ 、*は $p < .05$ を示す

4. 留学生の問題別 第1回目(事前)と期末(事後)テストの結果比較

前学期の留学生は日本人学生と同様に3論理的思考の文章構造以外の項目で成績が高まった。論理的思考の3.文章構造問題の結果は、5点満点の1問(部分点なし)のため測定できていない可能性がある。一方、後学期は全体的に前学期の留学生よりも人数が少ないものの(前学期47

●共通科目基礎教育●論理的思考・表現のプロセスを反復、ロジックツリー等のツールを使用など

名、後学期 13 名) 成績は高い傾向であった。しかし、問題項目によって伸びが大きく異なった。

表4 2014年度の第1回目と期末テストの問題別の結果：留学生

		前学期			後学期		
		1回目	期末	伸び	1回目	期末	伸び
漢字語句	1. 読み(20点満点)	6.00	11.48	5.48**	6.7	12.6	5.9**
	2. 書き(20点満点)	9.48	12.10	2.63**	7.4	9.2	1.8
	3. 語句(10点満点)	3.25	4.04	0.79**	3.1	4.3	1.2
会話	1. 談話完成(30点満点)	6.44	9.23	2.79**	10.6	14.6	4.0*
	2. 知識(8点満点)	4.17	5.10	0.94**	5.3	6.1	0.8
	3. 表現訂正(12点満点)	3.38	7.35	3.98**	6.5	7.8	1.3*
論理的思考	1. 要点把握・要約(25点満点)	6.50	10.04	3.54**	6.9	9.8	2.9**
	2. 表現訂正(25点満点)	1.10	4.63	3.52**	2.7	8.2	5.5*
	3. 文章構造(5点満点)	2.29	0.83	0	1.5	0.8	0
	4. 図表説明(10点満点)	2.79	4.96	2.17**	4.1	5.0	0.9
	5. 知識(10点満点)	1.15	3.42	2.27**	0.8	3.9	3.1**
	6. 意見文作成(15点満点)	3.63	6.54	2.79**	5.0	6.6	1.6

注) **は $p < .001$ 、*は $p < .05$ を示す

本科目についての学生からの評価

2014年度に大学全体で行われた学生からの授業評価において、本科目の「満足度」は概ね高く、5点満点中 4.3点(科目区分内平均)であった。

学生の学習のあり方や教授法の果たす意味等に関する、担当者の基本的な考え方(教育哲学)

本科目で目指す論理的思考力・表現力とは、多様な価値観が共存する現代社会で、学生が将来他者と協働して新しい価値を創造するために必要となる汎用的能力であると考えます。

論理的で説得力のある文章作成や発表の仕方を知識として理解するだけでなく、授業という他者とともに学ぶ環境を活かし、自分とは異なる他者(教師や他の学生)の視点・意見を推測したり、活用したりすることを、文章作成、スピーチ、プレゼンテーションなどの活動から実践的に学べるように工夫をしている。

授業風景



その他の特記事項

本科目に関する発表(2014年度)

- 第10回国際日本語教育日本研究シンポジウム 2014年11月15日~16日 香港大学にて 田川麻央・徳田恵「本の魅力を論理的に伝える活動の実践：日本の大学初年次クラスにおける中国人留学生の原稿作成」
- 特別企画シンポジウム「批判的思考と教育」 2015年3月17日 早稲田大学にて 木山三佳・木下直子「批判的思考を取り入れた文章作成の指導—『コミュニケーションスキルの学び』の例から—」

統合技術演習

目白大学

看護学部看護学科

山田秀樹

受講生数	4年生全員（100名）
科目の位置づけ	<p>目白大学の教育理念「育てて送り出す」について、看護学部では教育方針として「実践能力を自ら研鑽して向上させていくことができる人材」を育成し輩出することを掲げ、課内外の教育に取り組んでいる。この実現を果たすべく看護学科のカリキュラムは、看護職者として必要な5つの領域「人間理解領域」「社会連携領域」「看護の基礎領域」「看護実践領域」「看護の統合領域」を柱にして専門教育科目を区分し、年次進行とともに内容・実践がより複雑な領域へと移行しながら、段階的・体系的に専門的知識・技術・態度を修得できるよう編成されている。</p> <p>「統合技術演習」は、その領域区分の最終段階にあたる「看護の統合領域(看護を将来的に発展させるための知識・態度を習得する科目群)」の中で、最後に開講を終了する4年次・必修科目、すなわち看護学科カリキュラム上の最終履修科目である。「育てて送り出す」出口科目として、学科DPを達成し看護学の学びを対象への実施・評価や自己研鑽に生かせることと、看護職者として自ら立って社会に歩み出せる実践能力を備えることが、授業を通じた学習成果として期待される。</p>
科目の到達目標	<p>初回導入時に、以下の科目のねらいを確認して学習の意義を掴ませながら、科目の目的と到達目標を確認し、各回授業時に各回目標とも重ねて授業を展開する。</p> <p><u>科目のねらい：</u></p> <p>看護者は、他者の力を必要としている対象に即して自己の持てる力を働かせていく専門職者である。この、どのような対象にも応じて自在に看護を行える看護実践能力を修得するためには、多くの人と認識を交わし合う中で、対象の描き方を実践的に錬磨するとともに、相手にとっての自己の関わりの意味を自己評価する力を高めながら学びを進めることが大切である。</p> <p>そこでこの科目では、さまざまな事例の対象に対する看護・保健による援助について、個々の力をグループでの事例検討に差し出し合いながら、対象の援助の必要状況を具体的に読みとって状況に応じた援助内容を構築していく過程を演習として辿っていく。その過程を通して、対象の健康状態や生活の場の実際の状況に応じて、看護や保健の知識・技術・態度を統合的に応用させて問題状況を読みとり・読み替えて、看護を対象の状況に応じて統合的に展開していける看護実践能力の修得を進める。</p> <p><u>科目の目的：</u></p> <p>4年間の看護学カリキュラム各分野で学んだ知識・技術・態度を統合して、看護の対象と看護が展開される状況を読みとり、状況に応じた臨床実践を可能にする看護実践能力を修得する。</p> <p><u>科目の到達目標：</u></p> <p>以下の4つの目標を到達するために、科目のねらいに即した学習目標を内容的に提示し、授業での取り組みが形式的にならないよう学びを進める。</p> <ol style="list-style-type: none">1) 事例の状況を読みとり、事例の持つ課題を的確に抽出できる。<ul style="list-style-type: none">・事例中の事実から対象に起こっている具体的状況をイメージする。・各事例の事実が持つ意味を、対象の位置からその状況の中でつかんでいく。・同じ健康障害でも対象の状況により異なる看護の必要性を理解できる。2) 対象の状況に応じた援助の方法を計画できる。<ul style="list-style-type: none">・看護展開の場の違いにより、資源の活用や援助方法を検討できる。・対象の置かれている状況の中でどのように生活しているか・いくかをイメージし、看護の介入のあり方を想定し企画できる。3) 計画した援助への対象の反応を見つめながら実施・評価・修正できる。

●専門教育科目<看護の統合領域>、4年次・必修科目 ●5つの事例を中心にしたグループ演習

- ・患者役・看護者役の条件を見きわめて、それぞれの立ち位置から実際の実施を思い描きながらロールプレイして課題をつかむことができる。
- 4) 看護の状況に応じた看護実践の展開能力を自己評価し、課題を見出すことができる。
- ・自身の頭の中に看護の評価基準を持ち、状況の読みとり方やその場の看護展開の適切さを評価できる。
- ・自身の看護実施における傾向をつかみ課題を明確化する。

教授法とその特徴

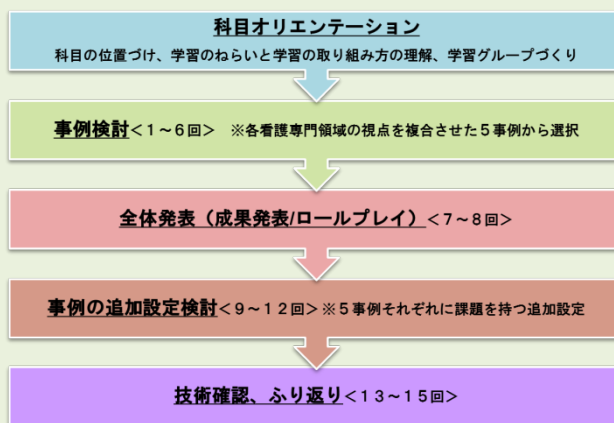
本科目のねらいを達成するには、授業に参加する学生・教員の双方が、演習の中で「看護を受け持つ・担当する事例」の状況に看護職者として自ら取り組むべく意思を持って臨める必要がある。

そこで、学生にとっては「4年間の学科カリキュラムの全ての講義・演習・臨地実習の学びや体験を統合して駆使できるように、カリキュラム進行の最後の位置づけとなる開講科目」として授業進行する。また、教員については「全ての看護専門領域(基礎看護学・成人看護学・老年看護学・小児看護学・母性看護学・精神看護学・在宅看護学・地域看護学)から専任教員10名で担当」し、対象の状況に応じて「看護や保健の知識・技術・態度を統合的に応用させて問題状況を読みとることや、看護を統合的に展開させていくことを実践的に助言・示唆する」ことで、看護の統合の意義を実感させながら教育できる体制をとっている。

中でも特徴的なものが事例教材である。15回の演習の中で通して「看護を受け持つ・担当する事例」に表現された対象の状況は、各看護専門領域の視点を複合させ作成した5つの事例であり、一視野に偏るようなとらえ方や手順書的な進め方では、対象を状況から俯瞰し統合的に解決することとは違う結末に向かうことから、看護職者の専門性が分野別のみには括れないことに気づく機会を作っている。また、異なる5事例に共通設定「糖尿病・慢性期」をすることで、学び合う視点を自ら重ねたり違いから学んだりすることが促進され、担当以外の事例や他者の事例への取り組みにも関心が高まり、学生の間で責任ある相互評価ができる素地もつくられていく。

また、事例を担当する6~7名グループの編成では、学生が科目のねらいとグループワークの目的「看護を担い行なうためのグループとメンバーシップ」を念頭におき、自ら結成したグループで、選択した事例を看護する課題に取り組んでいる。このことが、個々には違いがある力をグループでの事例検討のために差し出し合いながら、対象の看護の必要状況を読みとって援助内容を構築していく過程を能動的に促すことにつながっている。

授業展開の流れ：



特定の回の授業の流れ

第7・8回 全体発表(成果発表)：

15回の授業の中間となる「全体発表(成果発表)」では、学生の企画をもとに、グループ毎の看護場面のロールプレイによる事例検討の成果発表(立案した看護計画の5~6分程度の実施・実演)と質疑応答・相互評価(自己評価・他者評価)を行なっている。この発表会では、自グループの取り組みへのふり返りと、他グループの統合的な事例状況の描き方や看護の必要性の認識、具体的展開の違いから学び合う機会となるとともに、学生間での相互評価を通じて良かった部分や改善案を自他で突き合わせることで、評価結果を後半7回的事例検討に向けて活用している。

全体発表の企画は、学生グループのリーダーが集まるリーダー会で事例検討と並走して行なっており、発表会場の作り方から使用物品の借用といったハード面にとどまらず、発表内容が効果的に届くよう発表方法・時間や内容による順番調整、シナリオの作成等の取り決めまで、学生主体で進行する。

●専門教育科目<看護の統合領域>、4年次・必修科目●5つの事例を中心にしたグループ演習

	<p>教員は、全体発表に至るまでの中で、リーダー会の企画・運営を支援するとともに、学生グループの事例検討の中で、疑問をきっかけにして事実の着目のさせ方を刺激することや、一義的・部分的な見つけ方に陥っている状況をリセットする機会を与えることを通じて、新たな気づきに喜びを感じながらグループワークを活性化している。</p>
<p>評価方法</p>	<p>授業(講義・グループワーク・演習)への参加姿勢、課題・レポート、成果発表、試験(技術確認)を総合して評価している。特に、成果発表と試験(技術確認)においては、学生グループでの自己評価・他者評価の評価内容を反映させるとともに、学生の評価能力も教員により評価しフィードバックしている。成果発表における評価の視点は以下の通りである。</p> <p><u>グループ自己評価:</u></p> <p>自分のグループの成果発表の過程をふり返り、感じ考えたこと・学んだこと・課題になったこと等を検討し評価する。ロールプレイ企画・発表内容についてのふり返りや、事例検討の全体像・計画の修正の必要性についても含める。</p> <p><u>グループ他者評価:</u></p> <p>成果発表から分かるグループの事例状況の描き方や看護の必要性の認識について、具体的な看護の展開について、対象グループのロールプレイ企画・発表内容について等を検討し、よりよい看護を実施するためにフィードバックする。</p>
<p>学習成果</p>	<p>学生の授業後のアンケートの記載から:</p> <ol style="list-style-type: none"> この科目を履修して・・・ <ul style="list-style-type: none"> ①とてもよかった14% ②よかった54% ③どちらとも言えない28% ④よくなかった4% この科目での学び(看護のとらえ方やつかみ方の変化も含む)について <ul style="list-style-type: none"> ①新たな学びが多くあった24% ②新たな学びがあった60% ③どちらとも言えない16% ④新たな学びはなかった0% この科目の学び方について <ul style="list-style-type: none"> ①とても有意義であった11% ②有意義であった57% ③どちらとも言えない27% ④有意義とは思わなかった5% 看護に必要なだと感じ・考えた「統合」について <ul style="list-style-type: none"> ・知識・技術・経験の統合 ・全人的に捉え膨らませること ・看護の実施とふり返り・改善のくり返しの統合 ・過去-現在-未来のつながりをふまえた統合 ・病院だけでなく患者や家族が戻る生活・社会役割・将来先のこと ・生涯を考えて全人的にみること ・患者のライフステージ応じた様々な視点とアセスメントの統合 ・社会と医療の場を区別せず「人」という視点を考え関わると自ずと統合 ・多職種や家族など常に患者さんを中心に統合していくことで看護が成り立つこと ・グループ(チーム)メンバーの考えの統合・協力 ・職種の特性だけでなく様々な知識や意見の違いを交わして対象のために強みにして生かすこと ・看護の力の周囲に存在する力も持てる力として考えること ・科目・知識は単体でなく1つの考えを導き出すための「糧」として統合 今後の課題として <ul style="list-style-type: none"> ・開講時期についての意見(3年次実習後間もない頃に、国家試験に近過ぎない、4年次早めに) ・教育体制の拡充
<p>担当教員のこの授業に対する思い</p>	<p>看護の大学教育の真価は、看護学部4年間に培った看護学の学力を駆使することでの看護実践能力を高めることにある。これを達成すべく、様々な事例の対象に対する看護・保健による援助について、グループ学習を主軸にした主体的な演習学習を展開し、対象の援助の必要状況を具体的に読みとって状況に応じた援助内容を構築する過程を辿れるようにしている。また、グループの成果を表現して全体で共有し、よい看護実践を目指して相互評価して、他の取り組みから自らも発展していける能力を磨くことが、学部の教育方針にもある「実践能力を自ら研鑽して向上させていくことができる」ことにつながるものと考えている。</p> <p>具体的には、以下の力を看護実践能力として醸成することに重点をおいて展開している。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①対象の事実の意味を思い描き、対象の位置から対象の状況を看護の視点で読みとる力 ②事例の具体的な事象から問題状況を読み解き、その状況の場に応じた看護の力により解決を導ける力

●専門教育科目<看護の統合領域>、4年次・必修科目●5つの事例を中心にしたグループ演習

- ③条件や状況の変化に応じて、柔軟に問題状況を比較し読み替えられる力
- ④個人の力の統合としてグループで自学自習し答えを創り出していく力
- ⑤グループ活動におけるメンバーシップを発揮していく力
(共通の目的に向け、互いの立場に立って持てる力を差し出し合い全体成果に参画する力)

授業風景



学生企画による成果発表会の準備風景



成果発表会のロールプレイ発表1



成果発表会のロールプレイ発表2



成果発表への質疑応答、進行・評価役も学生

その他の特記事項

学科カリキュラムの改訂により、平成27年度から科目開講時期が4年次秋学期から通年(4年次春学期～秋学期)へと変更となり、15回の演習授業として開講期間が長期に渡ることで動機づけ等への影響が心配された。実際には、数週～月単位のインターバルも生じる授業間に、学生による成果発表の企画・運営の支援や、事例検討成果の発表準備に取り組む各グループへの相談・助言に充てる等の学生側からの学習の求めに応じる機会として生かしている(平成27年度進行中)。

教授法が大学を変える

編集：日本私立大学協会 教育学術新聞

協力：日本高等教育開発協会

(<http://jaed.jp>)

平成28年3月31日 第1版発行

日本私立大学協会

(<http://www.shidai-kyo.or.jp>)

〒102-0073 千代田区九段北4-2-25

TEL 03-3261-7048

FAX 03-3261-0769

担当：広報部 小林

koei@shidai-kyo.or.jp